
Infinite Stratos -Futures Road-

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinite Stratos - Futures Roa

d -

【Zコード】

N3531Y

【作者名】

暁

【あらすじ】

偶然ISを駆る事となつた少年 織斑一夏と、ISと共に

生きてきた青年 金寺龍輔。

二人の出会いが、世界を動かす。

この二次創作は、原作の設定・世界観・IS・人物を中心にながらも、もう一人オリジナルの主人公を追加して、設定等を作者が自分なりに細かくしたりしています。用は、「作者が考えたオリジ

ナルエス」です。

また、作者は「機動戦士ガンダム〇〇」の影響を多大に受けていますので、そちらの要素が出てくる場合もありますので、「了承ください。

不定期連載です。

初の二次創作なのでこさか稚拙な部分もありますが、読んでいただけだと嬉しいです。
宜しくお願いします！

0・騎士の覚醒（アウォイニング）（前書き）

始めまして。暁です。
自身初投稿です。

まだなれない部分も多いですが、書き続けて行きたいと思います。

まず序章。
物語の動き始めた時。

0・騎士の覚醒（アウエイニング）

世界とこゝのは、常に止まらず動き続いているものである。

そして人の運命も、絶えず動き続けている。

そしてそれは、時に遅く、時に急激である。

数年前、全世界の弾道ミサイル発射装置がハッキングされ、制御不能となつたそれらが日本へ向かっていた。

その数、およそ2000。　と思われていた。

後に判明した事

各国政府の元で厳重に隠蔽された

だが、実際に日本へ向かつたミサイルは、そのうちの約68パーセントだった。

そして残りの32パーセントは、あらうことか、EU圏内の複数の市町村へ向かっていた。

都市部に近いヨーロッパのある田舎町。

その日、まだ幼い少女は逃げていた。

少女だけではない。その華奢な腕を掴んでいる母親も、その町の全員も逃げていた。

何故か？

生き延びるためだ。

…最も、少女は母親のされるがままになっているだけなのだが。

町ではひつきりなしにサイレンが響き、後にくるであろう危機を知らせてくる。

少女は、母親に華奢な腕を掴まれつつ、分けもわからぬまま同じように全力で逃げていた。

「 // サイルだ！！」

不意に誰かが叫んだ声に、その場に居合わせた全員が空を見上げる。

みさいる？

なんだろう、それ？

少女にはわからなかつた。

自分の目に映つている空に見える無数の黒い点が、人々の命を奪い、人々が作り上げてきたものをいとも簡単に壊す兵器である事を。

「――！」

自分の名を母親が叫ぶ。

阿鼻叫喚。

人々はパニックに陥り、そこは地獄絵図ともいえる光景となる。

やがて、その黒い点が徐々に近づいてくる。

それを思わずぽけつと眺めてしまふ少女。

母親が、自分の娘である少女を抱きしめる。

そして、その黒い点は炸裂した。

彼女等のはるか上空で。

それも、突如飛来した光線によつて。

「…え？」

ミサイルが自分たちの近くで炸裂すると思い、自分の娘をきつく抱きしめていた母親は、思わず間抜けな声を出してしまつた。

彼女だけではない。

自分たちへの脅威が一時消え去つた事に驚きを隠せず、町の住民からは困惑の声が出る。

上空では、どこからか飛来する薄いピンク色の光線が、的確にミサイルを打ち抜いていた。

それはミサイルだけでなく、そのミサイルを投下した戦闘機も的確に打ち抜き、爆炎と煙に変える。

一分もしない間に、町の住民に迫つていた脅威は全て消え去る。

そして、それは現れた。

一見すると、それはヒトガタに見える。

だが、確かにそうだ。そのシルエットは紛れも無く人間。まるで、人が何かのパワードスーツを着ているようだった。

そして、その背中から両肩に配置されている、特徴的な翼状のスラスターのようなもの。

そこから放出されている淡い白銀の光子が、少女にとつて印象に残った。

「きれい…」

思わずそんな声が出る。

それは町の住民たちも同じようで、次々と感嘆の声を漏らしていた。

暫くしないうちにその場に停滞していたヒトガタは飛び去り、都市部の方へと向かっていった。

「さ…救世主だ…」

誰かが、そんな声を出す。

「あれは…あの聖騎士は…我々の救世主だ…！」

バラディーン

そして、大歓声。

届かないであろう事は承知している。だがそれでも、住民たちは自分たちを救つた「救世主」という名の聖騎士に対する賞賛だった。

その中で、少女は呟く。

「わたしもああなりたいなあ…」

誰かのために戦う救世主。

このとき少女は、先ほど現れた聖騎士パラディンに対して微かな憧れを抱いた。

「そうね…」

自分の娘を後ろから軽く抱きしめ、母親は言つ。

「もし…あなたが人の…誰かのために行動したいと思えば…きっと

…」

少女の視線は、いつまでも聖騎士パラディンが飛び去った方向へ向いていた。

2017年5月24日。
後に「白騎士事件」と呼ばれるよびになる日本近海での一件。

第一次北欧戦争終戦。

一體の騎士は、世界の運命を加速させる事となる。

0・騎士の覚醒（アウォイーング）（後書き）

明確な年月、月日を設定してしまいました。
不評ならば少し考えます。なにぶんじつ細かい設定にこだわ
ってしまう性質なので…

希望があれば、オリジナル主人公の設定及びこの一次創作内での世
界観などの設定を出したいたいと思います。
既に設定等が自分で出来上がっているので、
まあ、出したほうがいいんだと思いますけど。

指摘、感想お願いします。

人物設定・世界観設定・用語集（前書き）

ここでは、世界観等の設定および、一夏と並ぶもう一人の主人公の紹介をしたいと思います。

書き忘れましたが、本作品はダブル主人公制度でいきます。

人物設定・世界観設定・用語集

オリジナル主要人物

金寺龍輔 (Ryusuke Kanadera)

本作の主人公の一人。表向きは日本出身。本編開始時24歳。

- ・一年一組副担任。ISの基礎理論、世界史、整備技術を担当する。
- ・身長180センチメートル。若干はねた黒髪で、髪型はあまり気にしていない。
- ・右の眼が赤色のオッドアイ。生まれつきではなく、ある事件が影響している。
- ・普段は紺色のYシャツの上に黒いスースを着用している（全身真っ黒）。明るい色の服を着る事は絶対にない。
- ・性格はクールで無愛想。己の感情はほとんど出さない。やや屁理屈が多い現実主義者。
- ・出生から21歳までの経歴が全世界のデータベースから削除されている。金寺の全ての経歴を知るのは束、千冬、更識楯無のみ。
- ・本編開始の一ヶ月前にIS学園の教師に就任する。一ヶ月半の教員研修を受け、2025年度四月から一年一組の副担任となつた。

世界観設定

- ・西暦2025年。

- ・再生可能エネルギー、電気自動車などが完全に普及、量子コンピュータ、ゴッタルドベーストンネル、リニアモーターカーの完全実現、宇宙旅行が本格的に始まるなど、科学技術の発展が著しい。
- ・地球温暖化、森林破壊などの環境問題深刻化を食い止めるため、全世界が一丸となつてその問題に取り組んでいる。

- ・時を同じくして世界各国で軍事開発が目覚ましい発展を遂げており、それ故第一次冷戦状態になりつつある。

ちなみに、核兵器及び原子力エネルギーは全て封印されている。

- ・ISが登場して以降、軍隊の重役にはISを操縦できるという事で女性が優遇される傾向となり、それに乘じて女性優位を掲げる政党が増えていく。

一部では女尊男卑を唱える者もおり、それらに関する男女差別が社会問題となつていて、

- ・ISは表面上、スポーツ用のパワードスーツ及び宇宙服となつているが、現存するISの六割が軍事転用されている。

女性優位の風潮は、軍内では当たり前で、一部の社会にも浸透しかけている。

インフィニット・ストラトス

- ・宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかつたが、「白騎士事件」に加えて北欧戦争

を強引に終了させた事もあり、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡り、宇宙進出を兼ねて飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移つていった。

・開発者は宇宙進出を第一にして造つたのだが、それは一向に進まず開発者が第一に危惧していた軍事転用が主になつてしまつといつ、皮肉な事態となつてゐる。

・ISは核となる「コア」（正式名称インフィニティ・コア。金寺曰く「無限炉」。）と、特殊カーボンによつて形成される腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。

・コアが最終的に埋め込まれる場所は機体によつて違つ。場所によつてコアエネルギーの伝達力が変わる事は特別な細工を施さない限り無い。

・コアによつて各装甲に伝達されたエネルギーによつて、絶対防護とシールドバリアが構成される。

・初期設定と最適化処理を終えて、特定の人物の専用機となつたISの「コアは、実質的にその人物の肉体と一体化する。金寺曰く「その人間の第一の心臓と脳みたいなものになる」。

故に、常に搭乗者とコアの間で意識・動作伝達が行われる。

・武装を素粒子レベルに分解して、収納する事が出来る（一般的には、量子化させて保存できる特殊なデータ領域がある、といわれている）。

・量子コンピュータの搭載に成功している。機体のOSなどのシステムは、この量子コンピュータによって構築される。

- ・搭乗者の戦闘経験蓄積や、精神の成長などの要素が絡む事で、それにコアが反応して形状や性能を大きく変える形態移行が行われる。
- ・現在、全世界に467のコアが存在し、ISそのものは464機が存在（封印された白騎士を含めて）。

パッシブ・イナーシャル・キャンセラー

- ・通称PIC。日本語表記は「受動的な慣性制御装置」。
- シールドバリアによって発生する空間干渉システム。これを量子コンピュータで制御する事で、浮遊・加減速などを行うことができる。

ハイパー・センサー

- ・ISに搭載されている量子コンピュータによって構成される高性能センサー。

シールドバリア・絶対防御

- ・全てのISに備わっている特殊防衛能力。
- コアから各装甲に伝達されたエネルギーを強固な膜として展開し、あらゆる衝撃などを緩和する特殊システム。

北歐戦争

- ・2017年5月23日に開戦したイギリス・スペイン側陣営対ドイツ・フランス側陣営による大規模になるとと思われた戦争。
- ・きっかけは、イギリス、デンマークらと同盟を結んでいたスペインがフランスの国防基地に空襲を仕掛けたことから始まる。
- ・両陣営の戦力は拮抗状態であり、空襲などで多くの民間人に被害が出る、と思われた。
- ・しかし三日後に突如、全軍のミサイルがハッキングされ日本へ向かっていった（白騎士事件）と共に、ISが両陣営の交戦領域に入した途端自体は一転。ISの圧倒的性能により一日半で両陣営が完全に沈黙。
- 双方は停戦協定を結び、軍事同盟も破棄する事になった。
- ・後にフランス国防基地への空襲を企てたスペイン軍の過激派は拘束され、極刑を宣告された。
- ・ちなみに、何故ISが両陣営を圧倒できたかというと、開発者曰く「試作型だから想像以上に性能がぶつ飛んでしまった」との事。これにより、以降に作られたISは意図的に性能が抑えられている。
- ・その開発者を両陣営が見逃すわけが無く、様々な国家が強引に引き入れようとしたが、それに辟易した本人は祖国である日本を選んだ。
- ・「この一件を境にISが様々な方面で認められるようになり、軍事に、宇宙進出に役立つ事となる。

IS操縦者育成特殊国立高等学校

- ・アラスカ協定に基づいて日本に設置された通称、IS学園。2019年10月10日創立。

・所在地は、日本の神奈川県藤沢市沿岸部。ちなみに、江の島が意外と近くにある。

・学科は、普通科（一年）、操縦科、整備科、宇宙専攻科（二、三年）がある。

・一年は一クラス30人で6クラス。学年全体180人、一年は全体で179人、三年は全体で185人。2025年4月6日現在、生徒総数544人。

通常の高等学校の平均と比べると、やや少ない。これは学園が所持しているISの数（50機の訓練機が存在）に関係している。

・生徒総数544人の内、543人が女子。男子は織斑一夏一人となっている。

当初は男女共学だったものの、元からISに関わろうとする男子も少なく、初期に入学した男子も全員中退したため、実質的な女子高となっていた。ゆえに、洗面所などの施設の七割は女性用のものとなっている

・校舎以外の主な施設に、訓練・試合用のアリーナが第一から第六まであり、二人一部屋の学生寮、大食堂、大浴場、ウェイトルームなどがある。

- ・学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉許されないと、いう国際規約が存在し、それ故新技術の稼動試験などに適している。

- ・制服は白を基調とした特殊なデザインになっている。個人のカスタムが自由で、上着のスタイルから下履きまで生徒の個が現れる。胸元のリボン（女子のみ）の色は学年ごとに違い、一年は青、二年は黄、三年は赤となっている。

- ・職員は、幾度にわたる面接や試験を経て決められる。IIS学園の教師である以上、その選考は極めて厳重。

倉持技研

- ・山梨県甲府市の山間にある、日本最大手のIIS開発社。世界シェアは第一位。金寺が一年前に一時期在籍していた。

- ・【打鉄】、【白式】などがここで開発された。IIS学園卒業生の最も多い就職先である。

- ・社名の由来は社長の苗字に由来する。

- バッキンガム・ファクトリー
- ・イギリス国最大手のIIS開発社。

- ・一年前に国内の一強であったウェールズ・ファクトリーとリヴィアプールが合併した企業。世界シェアは第四位。

- ・名の由来は、新しく作られたファクトリーがバッキンガム宮殿の近くであることから。

人物設定・世界観設定・用語集（後書き）

物語が進み次第、隨時更新して行きたいと思います。

人物設定に関しては、今の所オリジナルの主要人物は金寺龍輔一人です。

彼が1年1組の副担任という事で、山田先生の出番がなくなつたよう見えますが、見せ場はしっかりと作ります。主に本業のほうで。関わった事によるもの）。

尚、既存の登場人物に関しても少々設定が違つたりしますが、それは後に書きたいと思います（設定が違う理由は、ほとんどが金寺が関わった事によるもの）。

世界観やIISの設定ですが、原作を軸に足りなかつたり大雑把なところを更に付け足したりしてみた結果です。

色々めちゃくちゃに見えるかもしませんが、自分なりに考えた結果です。

ちなみに、何故IIS学園の所在地に神奈川県藤沢市を選んだかというと、沿岸部にあるというところ、首都・東京からのアクセスなどを考慮した結果です。

東京湾沿いにあるのはいくらなんでもおかしいですよね。

ずっと「IIS学園ってどこにあるんだろう…」と思つていて、この二次創作を書く際に、

「どうせだから自分で決めちゃえ！」

はい単純ですね俺。

そんな自分が嫌になります。

でも、こいつにこだわりたくなる性分なんです。お許しを。

こういうのが嫌いな人、拒絶したい人には、まことに申し訳ございません。

既存のコアの数を踏まえると全世界に存在するT-Sの数がおかしいですが、それにはしつかり理由があります。

後に作中に出てくる単語で「これなんだ?」というのがありました
ら感想を経て聞いてください。

確認次第載せていきます。

何か指摘があればお願ひします。

Hiro-タベース（繪書き）

「Hiro」では、本作品に登場する主な人物について記述しておきます。
そのうち～が出て来るかも…

原作とはどうぞ変わらないものから、最終更新されたものまで、色々
です。

I-Sマークベース

第一世代型

- ・その全てが試作型、所謂プロトタイプである。
- 初期に作られた二機は性能が桁外れのものとなってしまっているため、現行の機体と基本性能を比較するのは邪道である。

【白騎士】

日本製第一世代試作型。

【暮桜】

- 日本製第一世代試作型。
- ・待機形態：不明
- ・搭乗者：織斑千冬
- ・コア搭載位置：右腕装甲内に一基

日本製第一世代型。白兵戦のみを想定された超特化型である。前述したとおり近接格闘戦に特化しており、機動力も通常のものは桁外れ。

それゆえか、防衛面はさほど優秀でなく、燃費も良くない。一撃必殺に特化した機体の先駆けである。

名前の由来は不明だが、「夕暮れに舞う桜の花びら」のように相手を美しく華麗に薙ぎ倒す千冬の姿から名付けられたものと思われる。

ワンドファビリティ
单一使用能力：『零落白夜』

- ・コアによるエネルギー性質のもの全てを無効化する【暮桜】の必

殺技。通称「バリア無効化攻撃」。

無論シールドバリアも削り取れるため、この一撃だけでも相手のシールドエネルギーを大幅に削る事が出来る。

しかし、発動時には自身のシールドエネルギーを消費するため、諸刃の剣である。

第一回の世界大会で千冬は、瞬時加速で接近し零落白夜で瞬殺するというシンブルかつ強力な戦法で、見事に優勝して見せた。

「零落」とは草木の枯れ落ちること。「白夜」とは、高緯度地方で薄明が長時間続く現象のこと。

基本武装

・近接特化ブレード《雪片》ゆきひら

零落白夜用にカスタマイズされたオリジナルの近接特化ブレード。バリア無効化攻撃発動時には、刃が実体剣でなくビームブレード状に変わる。

ちなみに、「雪片」という字を「ゆきひら」ではなく「せっぴん」と読むと、雪の結晶体が互いにいくつか付着して、ある大きさになつたもの、つまり雪のひとひらという意味となる。

恐らく、零落白夜発動時の《雪片》の刃が、雪のように美しい白色である事から命名されたと思われる。

この名前の刀は、後に【白式】に継がれることとなる。

第一世代型

- ・各国で軍事転用が主となつたのを受け、兵器として開発されたモデル。現在世界で一番出回っている。

後付武装による戦闘用途の多様化に主眼が置かれている。
イコライザ

【打鉄】 うちがね

- ・主な搭乗者：篠ノ之等、その他IIS学園生徒など
- ・コア搭載位置：左脚装甲内に一基

日本製第一世代型。防御面を重視されており、初心者でも扱いやすいモデル。

IIS学園でも生徒用訓練機として配備されている。黒色の外見は武者鎧のよくなつており、お国柄が表れている。

機体名は、打撃の「打」と、日本刀の原料である「鉄」を合わせたものと思われる。

基本武装

- ・近接ブレード
- 本機の基本武装。日本刀のような形状をしている。
- その他、様々な武装を装備する事が出来る。
- 一例：五六口径アサルトライフル
- ：五九口径ロングライフル
- ：近接ショートブレード

第二世代型

- ・「操縦者の意思による操作装置」（イメージ・インターフェース）を用いた「第二世代型兵器」の搭載を目指している。

未だに試作型の域を出ておらず、一部を除いた機体は、燃費が悪

く重要な課題となつてゐる。

【ブルー・ティアーズ】

- ・待機形態：左耳の青いイヤーカフス
- ・搭乗者：セシリ亞・オルコット
- ・コア搭載位置：右脚装甲内に一基

アイルランド製第三世代型。ビーム兵器の実働データのサンプリングを目的とした試作機。

最大稼動時はビーム自体も自在に操るBT偏向制御射撃フレキシブルが可能。

「ブルー・ティアーズ」は、直訳すると「蒼い雲」という意味になる。

武装

- ・六七口径高工ネルギーレーザーライフル《スターライトmk?》

【ブルー・ティアーズ】専用の長身スナイパーライフル。

- ・近接ショートブレード《インターフォンターナー》

防御用の近接武装。未だにセシリ亞はこれを上手く活用できていないのが現状。

ちなみに「インター・セプト」というのは、アメリカンフットボールなどの球技で相手のパスの隙を突きボールを奪うこと。よって名は「妨害するもの」という意になると思われる。

- ・第三世代型・無線式自立機動ライフルビット《ブルー・ティアーズ》

四基の射撃型特殊レーザーガビット + 一基の弾道型ミサイルビットから成り立つ。

第四世代型

- ・装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指した世代。

現在はまだ机上の空論である。

【白式】 びやくしき

- ・待機形態：右腕の白いガントレット
- ・搭乗者：織斑一夏
- ・コア搭載位置：両翼のウイングスラスターに一基

日本製第四世代型（展開装甲が雪片式型に搭載されている）。倉持技研製。元は欠陥機として放置されていたが、それに束が手を加えた。

ツインインフィニティシステム搭載機。だが、本機に搭載しているコアは同調を前提とされていないため、同調率の不安定さが永遠の課題となっている。

ツインインフィニティシステム

- ・一つの機体にコアを二つ搭載し、エネルギーの出力を二倍ではなく二乗化するというシステム。

完全に稼動するにはコア同士の同調が不可欠であり、これが一定の値を超えると正常に稼動しない。

一つの「コアは同調専用に造られたオリジナルではないので、同調率が安定しない。

武装

・近接特化ブレード 《雪片式型》 ゆきひらしきがた

【暮桜】の主武装であった《雪片》の発展型。第四世代技術である「展開装甲」が使われている本機唯一の武装。バリア無効化攻撃発動時にはビームソードを形成し、通常は実体剣である。

ワントップアビリティ 单一使用能力：《零落白夜》

・「コアによるエネルギー性質のもの全てを無効化する【白式】の必殺技。通称「バリア無効化攻撃」。

無論シールドバリアも削り取れるため、この一撃だけでも相手のシールドエネルギーを大幅に削る事が出来る。
しかし、発動時には自身のシールドエネルギーを消費するため、諸刃の剣である。

本来は【暮桜】の单一使用能力。

IISデータベース（後書き）

何か疑問点等があれば、質問お願いします。

1・出発（前書き）

いよいよ、一夏と金寺の物語が始動します。

ちなみに、大体5章ぐらい書き溜めているので、感覚を短くして投稿していきます

1・出会い

日本の神奈川県藤沢市に存在する、IS学園 正式名称、IS操縦者育成特殊国立高等学校。世界初の、ISに関する人材 主に操縦者の育成を目的とした、高等学校である。

運営及び資金調達は日本国が行い、得られた技術は協定参加国の共有財産として公開する義務があり、黙秘権は一切無い。

何故そのような事になったかというと、数年前の国連理事総会にて、EHSサイドが言い放った一言が原因である。

『貴殿の國の者が開発したISによって、今までの様々な常識が打ち破られ軍事バランスすら壊してしまった。日本国は責任を持つて、それらの管理などを行い、得られた技術を他国に提供せよ。』

簡潔に言えば、このようなものである。

一部では、ISによって軍隊の大半をつぶされかけたEHSサイドの報復といわれていたが、定かではない。

これに各国は賛同。日本政府は受け入れざるを得なくなってしまった。何せ、これを拒否すれば外交に多大なる影響が出る可能性があるのだ。

さて置き、この学園に入学した一年生は、まずISの基本事項や

通常の高校の学習専攻などを廻つ『普通科』に入る。

一年生時から学科が別れ、国家代表を田指す操縦者の育成に重点を置いた『操縦科』、ISの開発・研究・整備を専攻する『整備科』、本格的に宇宙進出を目指した学習を行つ『宇宙専攻科』の三つに分かれる。

一見、そんなIS学園はそのよつた点以外普通の高校と変わらないように見えるが、一つ特徴がある。

全校生徒が女子なのだ。

きつかけは、白騎士事件 北欧戦争終結 から一日後に
発覚した、ISの致命的欠陥である。

その欠陥とは、『女性にしか反応しない』。

ISは、機体装甲に触れ、そこから流れ込んでくるISの情報を読み取る事で、初めて搭乗できるようになる。だが、どういうわけか、北欧戦争終結後、ISが男性に反応せず、女性にしか反応しなくなってしまったのだ。

原因 不明。

この事態には、生みの親である篠ノ之束も頭を抱えざるを得なくなつたといわれている。

その原因が、ISの中核を担つ動力源『インフィニティ・コア』主な呼び名は「コア」にある事は容易に想像できたらしいが、何をしても原因の解明には至らなかつたといつ。

結果、新世代のパワードースツであるIISは、『女性専用』のレッテルを貼られることとなつたのだ。

それゆえ、自然と 必然的に、IISに関する事業、団体には、女性が多く関わるようになる。

IJの学園も当初は男子がいたが、それも極僅か。その極僅かの男子も中退し、結果的にIIS学園は実質的な女子高になつてしまつた。そのIIS学園に、このたび数年ぶりに男子学生が入学する事になつた。

名前は織斑一夏。

入学式一ヶ月前の入試で、偶発的な要素によつてIISを動かしてしまつた、『世界初の男性IIS操縦者』だ。

そのせいか、今年度の入学式はやけに盛り上がつていた。

IJのめでたい式典の日に、一人だけ出席していない教師がいた。

その教師は諸事情により、学生寮の1026室に自分の住まいを置いている。

“彼”は、本来は備え付けコンピュータしか置いていない机の上

に無理やり設置した一つの大型空間投影モニターと四つの小型モニターに目を通し、手元のキーを一定のリズムで叩いている。

今モニターに表示されているのは、日本製の第一世代型IS、【打鉄】の機体スペックなどである。

六つのモニターに表示されている情報を亞音速で一気に読み取るのは常人にとって至難の業だが、それを実行しているその青年そもそも彼は常人ではない にとつては、何の苦にもならぬ事だ。

「しかし…日本人は式典が好きなんだな…」

先ほど少しだけ覗いてきた入学式の光景を思い出し、キーを叩く手を止めながら青年は咳く。

もつとも、表面上日本人である彼が言つにはいさか違和感があるが。

とはいって、このIS学園の教師になつたのはつい三ヶ月前だ。それも突然。

ここ数年ISの技術者として世界を飛び回っていた彼に正式な要請が来たのはその半月前。数年契約で、学生寮の一室を私設研究所として使用してもよいといつおまけ付きだった。

彼は少し悩んだが、結局OKの返事を返した。何より施設が軒並み整っているこのIS学園なら研究に没頭できるだろうし、各国から怒涛の如く来るオファーにも辟易していたところだった。全世界のISに関する技術の48パーセントが集うこの場所は、彼のような研究者にとって最高の環境と言つても過言ではない。

椅子の背もたれに体重を預け、脳裏に浮かぶこれまで世界を飛び

続けた日々の記憶に、彼が意識を集中させていようと。

「ンンン。

部屋のドアをノックする音が耳に入ってきた。

「…誰だ」

「私だ」

女性にしては鋭い、凜とした声を聞いて、彼はゆっくりと立ち上がりた。一応、彼女はこの学園において自分の上司のようなものである。

「何か用で？」

「馬鹿者、今日は入学式だらう。一年一組の副担任になつたお前に用が無いわけがない」

「…それもそうか…」

女性 織斑千冬の言葉に嘆息すると、彼はベッドの近くにある洋服掛けにある黒のスーツを着る。

彼の服装は黒のスーツ上下に、上は中に紺色のシャツを着込んでいる。黒は彼のパーソナルカラーのよしなもので、何色にも染まらずに自分らしさを貫く彼に合つ色だ。

右拳で胸元を数回軽く小突き、大きく息を吸い、吐くと、彼はドアへ歩んでいく。

ドアを開けると田の前に千冬の姿があった。彼女は一年一組担任である。

「悪いがこちらは職員会議があつてな…それまで金寺、クラスを頼む

「オーライ。行つてくるぜ」

千冬に一言だけ言つて、金寺龍輔は、一年一組の教室へ向かつ。

世界は、急速に動き出す。

この学園内では、男性といつのはまさに希少生物で、好奇の目で見られることが多い。

一年一組の教室内、真ん中の一番前の席に座る少年 織斑一

夏は、まさに今そんな視線を真に受けていた。

何せ、一年一組30人中、彼以外の生徒29人は女子なのだ。
声を掛けられているわけではないが、視線が身に突き刺さる。ヒ
ソヒソ話している声も聞こえるが、十中八九一夏のことを話してい
るのである。

とにかく、居心地が悪く、つらかった。

女子だらけの学園 親友曰く、『樂園』に一夏が行く事になると知ったとき、彼の友人たちは揃いも揃つて一夏のことを『羨ましい』と言つてきたのだが、今の一夏は彼らに『これが現実だ!』

と吼えてやりたかった。

そんな中で彼の左側、窓際の席にいるポーテールの少女の名前を彼は知っている。

篠ノ之箒。小学一年生から四年生まで時を共にした剣道のライバルで、その苗字の通り、ITSの基礎理論を提唱した篠ノ之東博士の妹である。

……なのだが、どうも彼女は先ほどから、近寄りがたいオーラを放っている。一度視線が合つたが、何故か箒はすぐに視線を逸らしてしまった。

これから先の学園生活を想像し、一夏が本格的に心配し始めたとき、教室のドアが開いて一人の青年が入ってきた。

大半の女子生徒から、黄色い声があがる。それもそのはず、青年は一般的にイケメンと呼ばれるような顔立ちをしている。

一夏はそれ以上に青年の醸し出す雰囲気に思わず声をあげそうになつた。

整つた顔立ちに、鋭い眼、若干ウェーブがかかつた黒い髪。

だがそれ以上に一夏の目に焼きついたのは、色が違う眼　　オツドアイだった。

左眼が漆黒なのに対し、右眼は禍々しい鮮血のような赤色。それがあまりにも、印象に残つた。

生徒の歓声に溜息をついた青年は、一同を黙らせつつ教壇に向か

うと、やや面倒くさそうに手元のコンソールパネルを操作する。程なくして、教室前方の電子黒板に『金寺龍輔』という文字が浮かび上がった。

「今からUHRだが…手短に終わらせる。俺は一組副担任の金寺だ。担当は主にE-Sの基礎理論、世界史、整備技術…以上だ、何か言いたいことあるか?」

言葉を切った途端、およそ三分の一の生徒が挙手。無論、金寺に対する質問だらう。

その光景に、一夏は少なからず恐怖を覚えた。

一人目、出席番号一のショートヘアの子。

「誕生日はいつですか?」

「二月十八日」

二人目、同じくショートヘア。

「趣味はなんですか?」

「研究、一人旅」

三人目、ロングヘアの…以下全省略。

こんな感じで金寺に対する質問が飛び終えたといふと、金寺は一息つくと教室を一瞥した。

一夏はとくと、

「…なんか凄いやこの人」

怒涛の質問攻めにも一切動搖することなく、素つ気無く答えるその姿は彼にとってある種の勇者にも見えた。

「…そういうわけだ。それで」「金寺先生、もう一つだけよろ

しいですか？「

改めて口を開きかけた金寺に、再び質問が投げかけられる。

ほぼ全員の視線が、音源に向かう。声の主は、縦ロールのある長い金髪の少女だった。

「何だ、言つてみる」

「…“男性の”金寺先生は、どのようにEISに関わってきたのですか？」

『男性の』という部分を強調した少女に、一夏はやや違和感を抱いた。まるで、『何故男性のあなたがEISに関わっているのか』とも言つているような感じだ。

当人の金寺は意に介する事も無く、簡潔に答えた。

「俺は数年前まで一匹狼の研究者だった。最近はいろんな国で技術開発に携わってきたが…ああ、みんな知らねえよな。まあビーム兵器に関する基礎理論をくみ上げたり、非限定情報共有を証明したり、適当になんやかんやしてたんだ」

非限定情報共有 シェアリングとは、コア同士が行う情報の共有のこと。これを各自が進化の糧にしており、それにより形態移行などが行われるといわれている。

これはチーム兵器と同様、近年の研究によつて現実的な理論が築かれたばかり。そしてそれらの理論を最終的に確立したのが、この金寺龍輔なのだ。

だが、それを“適当に”と言つてのけた金寺の神経が、一夏には今ひとつ理解できなかつた。

「終わりか？」

「はい、…無礼な質問をして申し訳ありませんでした」「気にするな、俺は気にしてない」

それを聞き、少女は納得したように納得していないう様子で呟くように言つた。

彼女にしてみれば、やはりI-Sに男性が関わっている、というのに違和感を覚えていたのだろうか。

一夏がそんな事を考えていると、再び教室のドアが開き、今度はスーツを着た女性が入つてくる。

その女性の名は、

「げえつー？ 千冬姉ー？」

自分の姉、織斑千冬だった。

一夏が座りながら大声をあげた直後、彼の頭で炸裂音が響く。 千冬の持つ出席簿による殴打攻撃通称、「出席簿アタック」の音だった。

「…学校では織斑先生と呼べ」

「つよ、了解…」

出席簿の一撃とは思えない、尋常でない鈍痛に頭を抱える一夏をよそに、千冬は教壇に立る金寺に話し掛けた。

「すまない、遅れた。『苦勞』だったな、金寺」「苦勞に値しない」

ぶつかりまくり短く言つて教壇から離れる金寺を見て、千冬は苦笑を浮べた。

「全く……お前は本当に変わらないな」

「そう言つお前も前に再開した時と変わつてなかつたけどな」

「時々言われる」

再度苦笑を浮べ、千冬は金寺に変わつて教壇に立つ。
自分の姉が教壇にいる。この状況が読めない一夏をよそに、千冬
は口を開く。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者
に育てるのが私の仕事だ。これから機動兵器を扱つていく身として、
私の言う事はよく聞きよく理解しろ。これは絶対だ。反逆するのは
勝手だがな」

悪い言い方をすれば、横暴とも取れる物言い。一夏は絶句したが、

「キヤー——！」

「千冬様、本物の千冬様よ！」「

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から……」

「私は稚内から……」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

女子生徒の大半はこの通り。

それもそのはず、一夏の唯一の肉親である彼女は第一回 I.S 世界
大会『モンド・グロッソ』の格闘部門及び総合優勝者で、公式戦負
け知らず。事実上の、世界最強である。

それはすなわち、この世の女性の憧れなのだ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられ

る。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？

たぶんそうだろうな。

くしくも、一夏と金寺の考えた事は全く同じだった。

それを証明するように、数人の女子が再度黄色い声をあげる。

「きやああああああつ！！お姉様！もつと叱つて！もつと罵つて！」

「でも時には優しくして…」

「そしてつけあがらないように躾をして…」

最早危ない領域に達しているのも何人かいたが、一夏は意図的にそれを聞き流し、自分の姉に質問をした。

「千…じゃなくて、お、織斑先生はいつからこの教師に…？」

「それは後だ、いずれ説明する。今は、SHRを終わらせるぞ」

千冬の言葉に一夏が軽く頷くと、これらのやり取りを聞いた数人の生徒が気づいたように声をあげた。

「え……？ 織斑君って、千冬様と知り合って……？」

「親戚とかなのかな？ 同じ名字だし」

それを聞いて一夏は少なからず驚きを露にする。

てっきり一夏は、自分と千冬が姉弟であることが知られていると思っていた。織斑という苗字は、それほど多くいるものではないはずだ。

「それじゃあ世界で唯一男でHISを扱えるっていうのもそれが関係して……？」

それは無い。

別に確信があるわけではないが、本人は直感的にそう思った。いくらなんでも、それが関与しているとは思えない。確か国際I S連盟のお偉いさんもそう言つていた。だとしたら、それ以外に何か理由が

そんな思考を遮断するよつて、チャイムが鳴り響く。

「朝のSHRはこれで終わりだ。諸君らにはこれからIISの基礎知識を半年で覚えてもらひ。その後、実習だが基本動作は半月で体に染み込ませる。これは絶対だ。いいな？」

直後、一糸乱れぬよつて生徒たちの返事が響く。呆れるよつて軽く息を吐いた一夏は、先ほどとは別の考えに没頭した。

(機動兵器、ねえ…)

いまや、IISが各国軍の要である事は、当然一夏も知つてゐる。それを、世界最強の弟である自分が操る事になつたというのは、正直運命のいたずらのよつてなものを感じさせた。

そもそも、一夏はIIS学園ではなく、生活面で姉 千冬を困らせないためにも、学費が安く就職率が高い私立愛越学園を受験する予定だった。

だが、彼にとって不幸だったのは、その愛越学園の試験会場が市立の多目的ホールであり、IIS学園の試験会場もそこにあつたこと

だ。生憎、当時中学三年生だった一夏はホール内で迷ってしまい、係員に聞いてもよく分からず八方塞の状態だった。

そんな中、迷い込んだ部屋 実は立ち入り禁止区域なのだが、一夏は知らなかつた にあつた格納状態の I.S を発見。興味本位で触れた一夏だつたが、どういつ訳か I.S が起動してしまい、その場に駆けつけた試験官に目を付けられたのだ。

その後の展開も急激なもので、一時期国際 I.S 連盟に身柄を保護された後、『在学中はありとあらゆる機関、団体からの干渉を受けない』 I.S 学園に半ば無理やり入学させられたのだ。

正直、望んでこの学園に来たわけではないが、こいつなつた以上仕方が無い。

これから自分は、今世紀最強と謳われる機動兵器を扱う事になるのだ。気の緩みなど許されない。

(まあ、とにかく真面目にやつてていきますか…)

大して深く考えず、軽く背伸びをした一夏は、一限目の I.S 基礎理論の準備をする事にした。

その名の通りとしか表現しようが無いこの授業は、ISに関する基礎を徹底していく意味合いで行う。

この授業を行うのは、基本的に金寺だ。

ちなみに、金寺が授業を行うのはこれが初めてではない。彼が赴任したのは昨年一月。それから終業式までの一ヶ月ほどの間に、金寺は教育実習生のように教務について学び、今年度から本格的に教師となつたのだ。

授業の具体的な内容だが、まず最初はISの詳細な概要が主だ。中には、ジュニアスクールなどで数年前から学び始めているのもいるが、大半の生徒はそこまで深入りしていない。
よつて、まずは基礎を徹底する事から始めるのだ。

授業の進め方としては、生徒たちが入学前に配布されたISに関する参考書、という名の『電話帳もどき』にある程度目を通していふ事を前提としている。

一応IS学園は進学校に倣るので、当然といえば当然であった。

金寺が最初に担当したのは一年二組。これまた生徒たちから随分な歓迎をもらつたが、当人は気にしていないため特別困る事は無い。さしたる障害も無く、金寺は授業を終えた。

難なく初陣を終え、書類整理のために一旦職員室に来た金寺に、一人の女性が声を掛けた。

「お疲れ様です。初めての授業、どうでした？」

彼女の名は山田真耶。今年度から一学年の学年主任になった人である。

「まあ、特に楽も苦も無く、って感じだ。千冬のクラス、なかなか楽しそうな面子じゃないか？」

金寺がそう返すと、真耶は少しがつかりした様子だった。どうやら、先輩面をしたかったらしい。

「ああ、でももし分からぬ事があれば何でも聞いてくださいねー！」

他の女性と比べて豊満な胸をはり、堂々とした様子で真耶は言う。最も、短く髪を切りそろえ眼鏡を掛けている童顔の彼女には、威厳などという言葉が全く似合わないのだが。

「…で、アンタはこの学園何年目なんだっけ？」

「あ、そういうば言いつてませんでしたね。私は今年度で三年目です」

「…そうか。じゃあま、何かあつたら宜しくな

「はい！改めて！」

喜びを露にする真耶が、何かの小動物に見えた金寺だった。

無論、真耶が金寺のことを職場の同僚としてでなく、一人の男性として見始めていることを彼は知らない。

1・出会い（後書き）

さて、実際金寺は結構チートだったりします。

金寺龍輔と出会ったことにより、原作と比べて一夏たちの運命はかなり変わってしまいます。

2・その場でこらじと（前書き）

書き溜めているのでやくそく投稿してこります。
今回、若干設定破壊があります。

2・その場にいる人

続いて、一限目。金寺は引き続き基礎理論の授業を行つ。今回の担当は、自分が副担任を受け持つてゐる一年一組なのだが。

「…………」

授業開始から十五分後、異変を感じた金寺は視線を下に落とした。

その眼に映つたのは、なにやら顔が青ざめている一夏。机に乗せている教科書を適当にめくつては冷や汗をたらし、拳動不審に周りを見ていた。

「…………どうしたお前」

「あ……いや、その……なんとこ'うか……」

様子が気になつたので尋ねてみると、当人はなにやらほぐらかすよくな表情になつた。

「どうやら、あまり悟られたくないなからしね。

「お前が何考てるかは知らんけどさ、わかんねえのがあんなら今このつれに聞いておいたほうがいいぞ?」

金寺がそう言つと、一夏は一瞬うつむき、その後、何かを決意したように拳手する。

「先生!ほんと全部わかりません」

……予想通り。

何となく予測できていたが、いざ實際そつ言わると、頭が痛くなるような感覚になつた。

「お前さあ…あの『電話帳もどき』読んだのか？一応俺はお前らがあれに目を通した事前提にやつてんだけど」

彼の言ひ『電話帳もどき』とは、前述したとおり入学前に新入生徒全員に配布されるI-Sに関する参考書のことだ。

そのページ総数はなんと894ページ。金寺ですら、“暗記二時間もかかった”代物だ。

「…古い電話帳と間違えて捨てました」

金寺の眼が、信じられないものを見たように見開かれた。

I-Sの参考書、それはすなわち兵器及び最新の爆弾の取扱説明書といつても過言ではない。

それを“古い電話帳と間違えて捨てた”という一夏の神経が、金寺にとつて間違いなく万死に値するものであった。

「…とりあえずあとで再発行を申請しておぐ。最低でも来週の月曜までには全部頭の中に詰め込め」

「来週の月曜つて…そんな無茶

」

金寺の一言にさづ反論しかけた一夏だったが、直後、頭部に金寺の手刀が襲いかかってきた。

「痛つ！？」

「何が無茶、だ。お前が捨てなきゃある程度は授業についていたものを…何も考えずに捨てた自分を恨め」

「うひう…

手刀を喰らつた場所を押されると一夏は何も反論できなかつた。

当たり前だ。HSの参考書を捨てたのも、ひいては予習すらしなかつたもの自分。完全に自業自得である。

「お前はHS学園の生徒なんだからよ、ちよつといまいちHSで意識持てよな？」

「…はい」

しぶしぶ納得する一夏に若干呆れつつ、金寺は授業を再開した。

その後、休み時間。

「ちよつとよろこべて？」

一夏に声をかけたのは、先のSHRにて最後に金寺に質問した少女だった。

近くで見れば、金髪碧眼に引き締まっているプロポーションの持ち主。文句なしに美人といえるだらう。

「俺に何か用か？」

「その言い方…まあ今はいいですわ。ところで貴方、イギリス代表候補生のわたくしセシリア・オルコットのことを知つておられまして？」

反射的にそう返した一夏に若干呆れながらも、セシリア・オルコットは彼にそう質問した。

だが、一夏にはそれ以前の問題があった。

「えつと…代表候補生、つて何だ？」

一夏がそう言つた途端、教室の空気が一重二重の意味で凍りついた。

誰もが、代表候補生、という単語を知らない一夏に唖然としている。セシリアも、愕然としてしばらく言葉を発する事が出来なかつた。

「貴方…それすらも知りませんの？」

「？ああ…生憎今までYUとはほとんど無縁だったからな」

当然だろ、といわんばかりにさつまご切る一夏に対して、セシリアはある種の失望感を覚えた。

「ISとはほとんど無縁だった。」

男性の彼はそつかもしれない。だが、

「確かに、貴方今までISと無縁だった事は事実かもしませんが…それでも貴方は今こうして、その『無縁だった』ISに関わる事になりましたのよ」

「う…けど、俺たつて好きでここに来たわけじゃないんだぜ？だからこういった事もよく分からないし、仕方ないだろ」

反骨心が垣間見えるその言葉が、セシリアにとつてはぐだらない言い訳に聞こえた。

恐らく、彼が好きでここに来たのではない事は事実だろ。だが彼女にしてみれば、まるで数年前の自分を見ているような気分になるのだ。

「…無知は罪、とはいいません。しかし、そこから知りひとつしない」と、そ本當の意味で罪だと、わたくしは思っていますの」

セシリアはそれだけ言い切ると、何とか反論しようとすると、背を向けて自分の席へ戻ってしまった。

チャイムが鳴ったのは、丁度その時である。

一日の授業と帰りのＳＨＲを終え、放課後。職員室から金寺が一年一組の教室に戻ると、要件がある人物を発見した。

「ああ、いたか、織斑一夏」

「…？金寺先生？」

金寺に反応してムクリと体を起こした一夏を確認すると、金寺は彼の机に「1025」と刻印が入っているキー・ホルダーがつけられたキーを落とした。

「これは…？」

「見りや分かるだろ、お前の寮部屋のキーだ。そこが今日からお前の居住地となる」

それを聞きつつキー・ホルダーの刻印を見ていた一夏は、ふと思いついたように言った。

「あれ？でも俺って確かに一週間は自宅通学じゃなかつたんですか？」

IS学園は全寮制。IS操縦者を守るため、というのが基本的な理由だ。

とはいっても、全校生徒が女子つまり寮に住んでいるのも全員女子なため、男子の一夏をいきなりそういうところに放り込むわけにもい

かず、彼には入学一週間後まで自宅からの通学を言い渡されていた。

「それはさつきまでな。日本政府からの特命で、端的に言えばお前の保護が第一目的だ。一ヶ月もすれば何とかなるだろ?」「保護つて…ああ、そうか、そつだよな」

「どうやら一夏も合点がついたようだ。」

彼自身、IISを動かしてしまってからIIS学園に今日入学するまで、波乱が無かつたわけではない。

マスメディアの取材にはじまり研究所などからの勧誘が押し寄せ、拳銃の果てに誘拐されそうになってしまった事もある。

その一方で、IIS学園は基本的に特別な例を除き外部機関からの干渉を受けない事になっている。簡単に言えば治外法権だ。

日本政府としては、貴重な人材が厄介事にあうのをどうしても避けたいらしい。そこで、今回の特命なのだ。

「事情はわかりました。けど俺の荷物は」

「心配するな、私が手配した。まあ生活必需品だけだがな。着替えと、携帯端末の充電器があればいいだろ?」

それに関して金寺が説明しようとした途端に、千冬の声。当人は顔を引きつらせていた。

「え、じゃあ漫画とかその他もろもろは…」

「必要ないだろ?」

今度こそ一夏はがっくりと肩を落とした。確かに、いくらなんでも最低限すぎる。

「いや、日々の娯楽も必要だと思ひナビよ…」

そんな金寺の声は千冬に聞いてもひんぱんに消えていく。
その横で、千冬は薄い用子を一夏に手渡した。

「これは寮の心得だ。起床時間や食事時間、寮則が記載されている。
大浴場はあるが…基本お前、いやお前らは使えないからな」

「え? 何ですか?」

「…お前、女子と一緒に風呂入りたいのか?」

「やうか…」

金寺からのまともな指摘を受け、一夏は再び肩を落とした。
この少年、かなりの風呂好きなのである。

「あ、あと金寺先生、一ついいですか?」

「? 何だ?」

千冬が教室を後にしたのを確認した一夏に聞かれ、金寺はそちらへ顔を向ける。

このとき、一夏の脳裏に、数時間前に言われた言葉がフラッシュバックしていた。

『…無知は罪、とはいません。しかし、そこから知らないといふと、本当の意味で罪だと、わたくしは思いますの』

それ以来、セシリ亞・オルゴットに言われた言葉である。

「その…授業に関して正直まだよく分からぬといふがあるんですね。このままじゃついていけなくなりそうだからその、空いている時間とかでいいですから補習か何かお願いできませんか？」

「…」解した。俺のほうで都合のいい時間帯を探しておぐ。明日辺りなら何とかできるだろ？

一応、金寺龍輔は教師だ。教え子にそのような申請をされて断るわけがない。

最も、彼が教える事が出来るのはEHS基礎理論程度だが、数ヶ月前までEHSに関する事では右も左も分からなかつた一夏にとつては少なからずともプラスになるだらう。

「そんじや、そういう事だ。とつあえず自分の部屋行つて荷物の確認しつけよ」

そう言い残し、職員会議のために金寺もまた教室を後にする。

一夏も再度キー・ホルダーの刻印を見ると、教室を後にしてその部屋に向かう事にした。

「いじか…」

それから數十分後、一夏は指定された部屋へたどり着いた。ポツリと独語し、ドアを開けて部屋の中に入つていく。

部屋に入った一夏の目に付いたのは、大きな一つのベッド。元々二人用の部屋らしい。

「すげえなあ…」

感嘆の声を漏らし、一夏は早速ベッドに横になる。高級ホテルにありそうなそれは素材が良いらしく、横になるとなんともいえない気持ちよさが伝わってきた。

すると、

「誰かいるのか？」

聞き覚えのある声が耳に入り、一夏は自分の体が凍りつくのを感じる。

聞き間違えるはずが無い。今日約六年ぶりに再開した、幼馴染兼ライバルの声。

しかも、どうごつわけか声はシャワールームから聞こえてきた。

恐る恐るそちらへ顔を向けると、バスタオルを体に巻いただけの、幼馴染兼ライバルが現れた。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之」

両者想定外の事態に、お互いに顔を見合させ、硬直。

シャワー後の熱氣で上氣した頬に、濡れた髪、タオルを押さえる手が近いせいか肌に張り付いて、その曲線を忠実に表している豊満な胸。

六年間で成長した、年相応でない幼馴染兼ライバル 篠ノ之
笄の姿に、一夏は硬直すると同時に、思わず見とれてしまった。

一方、当の笄はというと、幼馴染でありかつて剣道のライバルであつた少年が、自身の田の前にいること。

そして何より、シャワー上りの自分の年相応でない 本人に
とつては若干コンプレックスになつていてる体を見られていることに、完全に言葉を失つていた。

田の前の事態に唖然としていた一夏は、笄が肩を震わせているのを田にする。

更に、彼の脳が、彼自身に訴えている。

「ここから逃げろ、と。

だが、残念ながら、その猶予は一夏に尽されなかつた。

「さやああああああああああああああつーーー?」

悲鳴と同時、篝はそばに立てかけてあつた竹刀を取り、一夏へ向かつて振り下ろす。

その寸前で我に帰つた一夏は、身を翻してかわし、ドアへ向けて疾走。その部屋から脱出した。

疾風の如きスピードで部屋から脱出した一夏は、思わずドアに背中を預けて座り込む。

周りから、

「……なになに?」

「あつ、織斑くんだ」

「えー、あそこつて織斑くんの部屋なんだ!いい情報ゲット~」

と、騒ぎを聞きつけてきた女子生徒の声が耳に入つたが、そんな事を気にていられなかつた。

その全員がラフなルームウェアで、かなり男の田を氣にしていい格好ばかりなのだが、最早今の一夏には氣にならない。

深く深呼吸し、何とか落ち着けた。一夏は、集まっている野次馬の中に見覚えのある顔を見つけた。

「…金寺先生？」

「お前は何をやつてこらんだ」

呆れてものが言えない、といわんばかりの口調で彼は言つ。周りの女子生徒と比べると背がすば抜けて高い金寺は、自然と目立つのだ。

女子生徒の一人が当然ともいえる質問をした。

「先生なんですか？」

「諸事情でこの寮使つててな、1026号室だが。…つか変な騒ぎ起こすなよ。下手すりや寮監様が駆けつけてくるぞっ。」

「…寮監様？」

「ああ。お前の姉貴な」

瞬間、一夏の背中が凍りつく。

もしもこの騒ぎで千冬が駆けつけてきたら、自分の身がどうなるか分からぬ。

意を決した一夏は、金寺に一つお願い事をした。

「か、金寺先生…ほとぼりが冷めるまで匿つてもいいですか？」

「…匿つ？」

「あ、いやその……色々事情がありまして……」

ルームメイトの風呂上りの姿を見てしまい殺されそうになつたな
ど、この場で言えるわけがない。

数人の女子生徒たちは総じて首を傾げていたものの、同じ男である金寺は何となく推測できたようだ。

「……まあ断る理由も無いし、一時的な」

そう言って、金寺は1026号室のドアを開け、浴室に入つてい
く。

やや戸惑いながらも、一夏は金寺の後をついていくことにした。

「うわあ～……」

金寺龍輔の部屋に入つて開口一番、一夏は思わずそんな声を出
ていた。

隣の部屋という事から、部屋の構造自体は同じだろう。だがしか
し、彼の部屋はもとの学生寮の面影を保つていなかつた。

「（）」、「研究室か何かですか？」

「確かに寝室兼研究室だな。俺が独断で改造した」

そう言いながらルームチヨアに座つた金寺は、一夏に「モニヒ座
つていい」と田線で話し掛ける。

それに気づき、一夏は軽く頭を下げてベッドに腰掛けると、驚き

を隠せぬまま部屋全体を見渡した。

「…………」

確かに、この部屋を始めてみるものはその景色に呆気に取られるかもしけない。

本来は勉強机であるはずの机は、一つの大型空間投影モニターと四つの小型モニター、それを操作するキーボードによって原形をとどめておらず、増設された本棚には多くの資料が整理されて置かれている。

部屋そのものはきっちり整っていながらも多くの精密機器がある様は、まるで地下にある秘密基地を思わせるようだった。

そんな中で、元々備え付けられていた小型テーブルに置いてあるコーヒー サイフ オンが何故かよく目立つ。よく見れば、その近くのレトロな木製の小棚にはコーヒー カップやコーヒー豆のパックが入っていた。

それを見れば、彼がコーヒーの愛好家である事は容易に想像できる。

「どう、さつき何があつた？俺の部屋に逃げ込むぐらいなんだから結構な事態なんじゃねえの？」

「まあ… そう言われればそうにして…」

言いくさうしながらも、一夏は事の経緯を話し始めた。

部屋に入った途端、ルームメイトである幼馴染の風呂上りの姿を偶然見てしまったこと、そして直後殺されかけたので全力で避難した事。

全て金寺の予想通りだった。

(…失敗したか)

正直、金寺は自分の迂闊さを呪つた。

このI.S学園は実質的な女子高。その寮のルームメイトとなれば当然女子。そしてこのよつたな事態が起きる事も予測できたはずだ。

「…悪い、お前のルームメイトが篠ノ之箒である事を把握してなかつた。俺のミスだ」

「金寺先生のせいじゃないです。俺が不注意だつただけで…でもこの後どうすれば…」

「一応、謝るしかないと思うけどな。篠ノ之箒に『俺は悪くない』とこう言い分が受け入れられるとは思えないし…」

「…ですよね…」

これから先のことを見越し少なからず不安を覚え、肩を落とす一夏。

女の集団の中で男一人というのは相当なものだが、この少年は入学一日にして、既に苦労していくようだった。

「…何だかんだでお前は苦労してんだな」

金寺の一言は棒読みと捉えられてもおかしくない口調だったが、一夏は同情してくれたのが少し嬉しかったようで、なおも愚痴に似た言葉を続ける。

「そりやそうですよ。ここ俺以外の生徒女子しかいないじゃないですか。そんな中で苦労するなつてのが…って、金寺先生はいつからこの学校にいるんですか？」

「厳密には今年の一月から。正式に教員になつたのは今年度からなんだよ」

「はあ…じゃあ、千冬姉がいつからいたかつて知つてます?」

「…確かに去年からだつたつて聞いてるが。お前知らなかつたのか?」

やや驚きつつ金寺が振り向くと、一夏は軽く首肯した。

「いや、教えてくれなかつたんですよ。第一俺も去年は受験勉強とアルバイトであまり余裕が無くて。まさかIRS関係の職業をしていたとは…」

「…なるほどな」

彼女の存在を気に食わないほんの一部の連中から『ブラコン』と揶揄される千冬の事だ。恐らく弟がIRSに触れる事を避けていたのだろう。

それがこのよつた形になつてしまつとは、なんと皮肉な事か。

「なんというか、最近は色々と激動で…」

「…まあ、割り切れよ。こいつなつた以上仕方が無いだろ?」

金寺のその一言を聞いて顔を上げる一夏に対し、金寺は彼の顔を見つ話した。

「俺がもし前立場だつたら、うだうだ愚痴るより今自分が何をすべきなのかを第一に考えるな。…まあお前はIRSに関しちゃド素人だし、この環境にも慣れてないだろ?から今すぐことは言わねえ

よ。けどな、『人間考える事をやめたら人間じゃない』、これは俺の持論だ』

人類がここまで発達してきた理由　　それは間違いなく、高度な知能を持つていたからだろう。

人は何かに対しても考えて、考えて、その“応え”を見つけ、未来へ進んでいく。

それが、金寺龍輔の持つ持論だった。

無論、彼はそれがこの世のこの理と思い込んでいるわけではないが。

あれから数分後、1025室にて。

「本つ本当に申し訳」ございませんでした…わざとじゃないんです…」

金寺の部屋を後にし、何とか篠に部屋へ入れてくれる許しをもらつた一夏は、金寺に言われたとおり全力で謝罪を行つてゐる最中だつた。

IS学園の寮は、部屋の構図からもなるとおり、基本的に一人部

屋となる。当然、篠も自分にルームメイトがいるのは承知済みだったのだが、

(まさか一夏とは……！)

実を語りと、篠は今まで、一夏を男として意識した事が無かつた。

幼馴染であり、同じ剣道場 実家の篠ノ之道場で切磋琢磨しあつた仲とはいえ、元々出会つたばかりの頃は険悪だつたため、一人の異性ではなく、一人のライバルとしてみていた。

だが、今こうして風呂上りの姿を見られた、という状況に、自らの心拍数が上り、頬が真っ赤になつていてるのがまじまじと分かつた。

これは、ただ知り合いに見られたから、というだけなのか？

それとも……

「……やはりお前が私の同居人だというのか？」
「あ、ああ、そうみたいだな……」
「どういうつもりだ？男女七歳にして同衾せず。常識だ」
「いやあ、俺も十五の男女が同居……いや、同棲するのは問題があると思うのだが……」

同棲。

その単語を聞き、筈は喉が渴いていくのが分かる。

同棲とは、正しく説明すると正式の婚姻関係に無い男女が一緒に暮らす事だ。

一夏の言っている事は間違つてはいないのだが、同棲となると、筈はどうしても付き合つてゐる男女が一緒に暮らす、といつまづて解釈してしまう。

「そ、それで……」の部屋割りは…お前が、選んだのか？」

ふと思つた事が自然と口に出る。

もしも、これが

「いや、何か日本政府からの特命みたいで、出来るだけ俺を早く寮に入れたかったそうなんだ。まあ一ヶ月も経てば って、筈、どうしたんだ？」

淡々と事実を話していた一夏だったが、何故か肩をがっくり落とした筈を見て、心配そうに聞いた。

その筈は、一夏から告げられた事実と、自身が描いていた荒唐無稽な妄想に全身の力が抜けていた。

一夏が自分の同居人と確認して、思わず“一夏が自分との同室を望んだ”、と思つてしまつたのだ。

「…けど、正直言つと、同室が筈で良かつたよ。見知らぬ誰かと一緒に

緒になるよりかはずっと良かつた

「ほ、本当か！？」

一夏の短い言葉を聞いて、反射的に筈は彼に食いつく。
同室が筈で良かった、というのが、自分を肯定してくれたみたいで何より嬉しかった。

実際、一夏にとつても見知らぬ人物と同じ部屋になるよりはほかに良かつたので、本心ではある。

一方で、筈は、「そうか…良かつたか…」と、表情を和らげ、とても嬉しそうだった。

その後、シャワーの使用時間を決め、着替える際の注意事項の確認など、同じ部屋で暮らしていく上での線引きの確認をした。

始めはいくら幼馴染兼ライバルと言えど、女子と同室なんてどんなことになるのかと身構えた一夏だったが、難なく進んでいったので本当に安心した。

その一方で、筈にとつてこの日の夜は最悪だった。

一夏の部屋の場所が判明した事で、一部の女子が殺到。多くは顔を見せという事で自己紹介も兼ねて軽く話している程度だったが、一年生で八名、一年生で十五名、三年生で二十四名。

上級生になる程、一夏と知り合おうと必死になっているのが分かつてしまつ。

何故、一夏が他の女子と会話していると変な気分になるのだろう。

自分でもわからない。第一、篠は一夏のことを異性としてみていなかつたはずだ。

いや、それは本人がそう思つてゐるだけなのかもしれない。実際、篠は諸事情で転校してからといつもの、一時も一夏のことを考えない事は無かつた。

最も、本人はその感情を、切磋琢磨しあうライバルがいなくなつたことによる物足りなさ、と解釈してきたのだが、もしかすればそれは違つたのかもしれない。

その後、時間が時間という事もあり一夏と篠は就寝することにしたのだが、結局、篠は自分の気持ちに整理がついていなかつた。

2・その場にいる」と（後書き）

設定破壊＝セシリ亞がかなりまとも・篠がまだ一夏に惚れていない（と思つてゐる）。

前者はよく考えてください。

イギリスの名門貴族のお嬢様ですよ？

たとえ両親が他界したとはいへ、何らかの教育を施してくれたような人物がいてもおかしくないと思います。

といふかいるのが普通なような。

という訳で、本作品でのセシリ亞は、名門貴族の後継ぎとしての自覚はある程度あります。

原作でのあの物言い、完全にオルコット家の恥をさらしですよね。それぐらい理解していないといけないので。

後者の篠に関しては、ただ単純に本人に自覚症状が無かつただけです。

今は本人が、一夏へ対する気持ちを恋心だと思つていない段階です。

ただ安心してください。

一夏がフラグを建てないような事はありません。

彼の特殊能力「瞬間に女子を落とす」は本作品では発動しないだけです。

特別な場合を除いて、人が他の異性を好きになるのはそれなりの経緯があると思うので。

ただ、どうしても金寺と一緒に中心の物語なので、書くのがおろそかになってしまいそうな…

後、金寺が妙に悟ってるみたいですが、それにもしつかり理由があります。

それが明かされるのはかなり後の事件にて。

とりあえず、これからも頑張っていきます。

3・自覚（前書き）

第一章、完結です。

一章あたりが意外と短いですね。

3・自覚

次の日。

「授業の前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者は、対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会への出席など、まあクラス長と考えてもらつていい。自薦・他薦は問わない。誰か居ないか?」

一限目の前、千冬の話を受けて、自然と静まり返る教室。

誰がどう出るか、皆が牽制し合つ中、一人の女子が堂々と手を上げる。

「はいっ! 織斑くんを推薦します!」

それを聞いた当人は、内心表情を渋める。

恐らくは、自分が珍しい存在だから、程度の軽い理由なのだろう。一夏にしてみれば、面倒の一言だった。

「私もそれがいいと思います」

もう一人、賛同する女子生徒。人の連帯感とは、こいつ言つときばかり強くなつていけない。

結局、四人ほどの生徒が一夏を推薦してきた。

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

確認をとる千冬。

流石にそれはまずい、と、一夏は必死に思考回路をフル回転させた。

この状況をどう打開すればいいかと考えに考えに考えて、彼が出した策は、

「はいっ！」

「何だ？ 織斑」

「俺はセシリ亞・オルコットを推薦します！」

またしても教室が静まり返った。

一夏に対して驚きの視線を浴びせるクラスメート 特にセシリ亞・オルコットをよそに、千冬は眉をほんの少し吊り上げると、一夏にその理由を聞く。

「ほつ、推薦理由は？」

「第一に彼女はイギリス代表候補生、すなわちエリートであるはずです。それに俺は彼女に対してとても責任感が強く、クラスを引っ張ってくれる存在だという印象を受けました。それが推薦理由です」

自分でも驚くほどすらすらと言葉が出てきたが、それはおそらく自分が本当にそう思っているからなのだけれど。

それには、昨日彼女に掛けられた言葉が、一夏にEHS学園の生徒としての自覚を植え付けたというのもあるかもしれない。

「なるほど、一理ある。さて、そうなると代表者候補が一人いることになるが……折角だ。一人で決闘をしてみたらどうだ？」

『決闘？』

一夏とセシリアを含めた何人かが声をあげる中、千冬はやや楽しそうに言った。

「『I』は『IS』学園。物事を決めるとなれば『IS』を用いるのがベストだろう。双方の実力を測る意味合いも兼ねればいい。どうだ？」
「確かにそうですわね。それならばわたくしも納得が付きますわ」

いつの間にか立ち上がり、セシリアが、一夏に向かつて声を掛けた。

当の本人も、こうなった以上それに挑むべきなのは分かつているのだが、

「あの……決闘云々はそれでOKなんですが、『IS』はどうするんですか？」

ISでの決闘となれば、無論ISが無ければ意味がない。

一夏がその質問をしたのと同じタイミングで、金寺が教室に入ってきた。

「セシリ亞・オルコットにはBT兵器のサンプリングの意味合いで、昨年イギリスのバッキンガム・ファクトリーから専用機が受理されている。織斑一夏、お前にもデータ採取の意味合いで学園側から直

々に専用機が受理される事になつたそつだ

教壇の横に向かつて歩みながらの金寺の説明を聞き、生徒たちが
騒然とする。

全世界に存在するコアは全部で467機。その限られた中の一つ
が一夏専用となるのだ。代表候補生クラスになつて初めて受理され
る専用機の価値は、言わずもがなである。

「これで対等ですわね。貴方の実力、この眼で見極めさせてもらいま
すわよ」

自信満々な様子で自分を指差すセシリ亞を見て、自然と一夏も氣
持ちが昂ぶってきた。

少なくとも、手抜きは許されない。

「ああ、分かつた。手加減はいらないからな

きつぱりと言い放つ一夏には、「ハンデがあつたほうがいいんじ
やない?」「流石に無理があるよ」といった女子生徒たちの声は一
切聞こえず、またその近くで金寺が考え込んでいるのも見えなかつ
た。

「……今日はこの程度でいいか。一応復習しつけよ
「…はい…分かりました…」

一時間にわたる補講を終え、思わず机に倒れこむ一夏を見ながら、金寺は軽く嘆息した。

この日の放課後から、金寺による一夏の補講が始まった。やはり一夏のISに關する知識の欠如は著しく、普通の生徒が中学一年生までに理解するであろうところをほとんど理解していなかった。

本人曰く、「千冬姉からISに關する事は一切聞いていない」らしい。これでは、ISに關する知識が欠如しているのは当然ともいえる。

ただ金寺は、何故千冬が弟に対してもISのことを一切言わなかつたのか理解できなかつた。

一番考えられるのは、ネームバリューの事だらうか。

初代IS世界王者の弟となれば、様々な意味合いで知名度が出てくる。そうなれば、ISに關する何らかの厄介事は避けられないだらうし、それを未然に防ぐ意味合いでしては良い策のうちの一つかもしれない。

しかしその一夏がIS学園の生徒となつた今、それは完全に凶と出ていた。

「…分かりにくい…何でこんな…」

「仕方が無いだろ。端的に言えばお前の知識が乏しいだけだ」

あまりにもストレートすぎる金寺の一言に、一夏は完全に気落ちしてしまったようだつた。

だが、それが事実。

自分のせいだらうが他人のせいだらうが、彼の知識が欠如している現実は変わらない。

そしてここはEVA学園。この環境に来た以上、否応無しにその知識を吸収し、自分のものにしていかなければならぬ。

「…」でそれを拒否するのは簡単だ。

だがそうなれば、恥をかくのはほかでもない自分自身。

「無能な男」「劣等生」のレッテルを貼られるのがオチだ。努力を怠ればその報いが刃となつて自分の身に返つてくる。

そのような血の話を一夏にしたといふ、本人はしづしぶと納得していた。

「…割り切れよ。今のお前はこの学園の生徒なんだから

それだけ言つと、明日の補講の時間を伝え、金寺は教室を後にしていった。

ほとんど誰もいない薄暗い廊下を歩く最中、ふと両腕の黒いブレスバンドに目線が落ちる。ス

一見真っ黒で飾り気の無いそれだったが、金寺にとっては自身への“戒め”を意味する大切なものであった。

(…何偉そうな口叩いてんだ俺は…)

自分に對して少々呆れ返りつつ、そんな事を心中で呟く。

脳裏に浮かんだのは、13年前の出来事。自分が感情的に行動してしまったせいで、結果的に最悪の事態を招いてしまったとある事件。

あの時、思い知らされた。

自分の勝手な行動が、下手すれば数多くの人たちを傷つけてしまう事。

そして、その後例えどのような行動をとるつと、その人たちの傷を癒す事はできず、それを払拭する事はできないこと。

今でもそれは金寺にとって耐えがたいトラウマであり、同時に彼の生きる原動力となっている。

過去の事だけはどうじょうもない。今教師となつた自分が出来るのは、自分が犯した過ちを教え子たちにさせない事だ。

おそらくそれが自分の生きる意味なのではないかと、このとき金

寺は思い当たつた。

(…贖罪ってこいつのか？こいつの。けど、俺には…その道しかないのも事実だ)

自分が死んでも何も変わらない。
強いて変わることがあるとすれば、人の心の闇ぐらい。

これも、金寺が24年間生きてきた中で思い知られた事実だ。

彼にとって生まれてからの24年間は、彼からたくさんの中を奪い、たくさんの戒めを得させたのだ。

今まで金寺が“経験したもの”は、常人の比にならない。
その大半がつらく、後悔したくなるような、トラウマのようなものについても差し控えないものだ。

だから、願う。
未来のために。

自分の教え子には、自分のよつになつてほしくない、と。

次の日、学園の外れにある剣道場。

「ダメだ…全然かなわねえ…」

久しぶりに剣道で簎と手合させした一夏だったが、全然かなわずに完敗を喫してしまった。

剣道場の隅にいるギャラリーの、

「織斑くんてさあ

「もしかして弱い？」

「本当にエス使えるのかな〜？」

といつた声も、今の彼にはかなり痛く響く言葉である。

「…お前は今まで何をしていたんだ」

地べたに座り込む一夏に対し、呆れるような視線を浴びせながら簎が呟く。

「いや、あれ以降バイトとか色々やつてしまして…中学三年間は帰宅部だったからな…」

それを聞いた筈の眉がピクリと跳ね上がったが、一夏の話した事は事実だ。

別に一夏は、筈が転校してからも剣道を止めたわけではなかつた。

暫くは続けていたのだが、自分と張り合えるライバルがいなくなつてしまつたせいかやる気があまり出ず、中学生になつてからは國家IS操縦者となつた姉の千冬を困らせないためにもアルバイトに励み続けた結果、すっかり腕は鈍つてしまつた。

「なら丁度いい。これからは私がお前の特訓に付き合つ

「ちょ、ちょっと待てよ。俺はISに関する事を教えてくれつて言つたんだぜ？何で剣道なんか

」

筈の一言に納得がいかず思わず反論した一夏。だが、直後、「剣道なんか」という事が筈の逆鱗に触れてしまつた事を思い知り、激しく後悔した。

「『剣道なんか』なるほど、一夏。お前にとつて剣道とは既にそのよつな

「ち、違うんだ筈！その、なんて言つた…だ、だから言つたろ。何で剣道を…」

額に青筋を浮べて自分を睨みつける筈の怒気に気おされながらも何とか自分の意見を言おうとする一夏。

それを見た筈は一息ついて落ち着くと、一夏の目をまっすぐ見つめ生真面目な表情で話し始めた。

「これは私の個人的な考えだが、ISの決闘　　すなわち戦いとなれば、それなりに武器も使うのではないか？私の記憶が確かなら千冬さんも第一回のIS世界大会では刀型の武器を使用していたはずだ。それに、どうやらお前は総合的に体が鈍っているようだしな。その点でも剣道を特訓内容に組み込んで損は無いと思うのだが、どうだ？」

真剣な筈の言葉を黙つて聞く一夏。

確かに、筈の言つている事は全て筋が通つている。

ISを扱うにはそれ相応の運動神経が必要であり、千冬も第一回IS世界大会「モンド・グロッソ」ではIS用の刀を武器にして戦つていたし、剣道をやっていた頃に比べて明らかに体が鈍っているのは当人も承知している。

それに、再来週のクラス代表決定戦で無様な姿を見せ付けるわけには行かない。たとえ「男でISを操縦できる」という特性があつても、操縦者として優秀でなければその価値はぼぼゼロに等しくなってしまう。

「ISは扱えるものの、操縦者としては優秀ではない」。

そんな評価をつけられたら自分の身はどうなるか、想像できない事はない。

「 分かつたよ」

それだけいい、一夏は自分に気合を入れなおすと立ち上がる。

『 割り切れよ。今のお前はこの学園の生徒なんだから』

脳裏に響く、昨日の補講後に金寺に言われた一言。
その通り。今の一夏はただの男子高校生ではない。一人のIIS
世界最強と謳われる機動兵器を扱っていく人間だ。
そうなった以上、弱い今まで立ち止まる事は許せない。

「それでこそ私のよきライバルだ、一夏」

正面で竹刀を構える筈が、にやりと笑みを浮べる。
「一人の少年」から「一人の戦士」へなるべく、一夏は右手の竹
刀を強く握り締めた。

3・自覚（後書き）

金寺と関わつていいく事により、一夏はかなり人間として成長していきます。

原作でも、一夏を導くような男キャラがいれば、一夏も立派に成長するんじやないかと思つて…

実際それが、金寺龍輔といつキャラの誕生理由でもあります。

金寺のトライアムは、後々明らかになります。

次章では、【白式】を中心に進みます。

【白式】をかなり改造していますので、その点はご了承ください。

ヒントは、動力源です。

指摘、感想お願いします。

1・封印われし（前書き）

今回から、クラス代表決定戦のことになります。

改めてみると、原作ブレイク多すぎですね（苦笑）

1・封印されし

数日後、一日の教務の後、手短に一夏の補講を終わらせた金寺が携帯端末を確認すると、一件のメールが入っていた。

送り主は、日本最大手のIS開発事業、「倉持技研」にいる知人の女性からだつた。

From・前川麻美

お久しぶりです。

先日聞きました。IS学園の教師に正式になられたそうですね。おめでとうございます。

つきましては、そちらの学園に在籍する織斑一夏専用ISに関して説明したい事があるので連絡しました。

出来れば、明日か明後日までに技研の第八研究室まで來ていただければ幸いです。

どうやら、倉持技研で開発中である織斑一夏専用機に関して、何か説明したい事があるようつだ。

ちなみに前川麻美とは、二年前に金寺が倉持技研に臨時技術顧問として三ヶ月間在籍していたときに知り合つた同年代の女性だ。

何かと関わる機会が多かつたが、彼女から ひいては倉持技研から連絡がくるとなれば、それ相応のことだろうか。

そう判断した金寺は早速学園に外出許可をもらい、山梨県にある倉持技研へ向かう事にした。

山梨県甲府市の山間の一角。

そこに、倉持技研の本社兼ファクトリーは存在する。

中央本線などを乗り継ぎ金寺が本社に訪れたのは、日が沈みかけ、後一時間ほどで夜の帳が下りようとしている頃であった。

以前一時的に所属していた事もあってか、受付の人物に名前と用件を言うとすぐに通してくれる。いつも見えて、金寺龍輔の人付き合いはかなり多いほうだった。

社内にある応接室に通され少しの間待機していると、そこへ紺色のスーツを着たセミロングの黒髪の若い女性が入ってきた。

「金寺さんーお久しぶりです、本当に来ててくれたんですね」

嬉しそうに声を上げ、軽く頭を下げた彼女が前川麻美。ちなみに
彼女、IIS学園の第一期卒業生である。

「アンタが来てほしい、ってメールしたんだろ。特別用事も無かつ
たし、今日にしようと思つてな」

ぶつきらぼうにそれだけ言つて、金寺は麻美へ対して手を差し出
す。それに答えるように麻美は握手に応じた。

「そんで、俺を呼んだ理由は？」

彼女が向かいのソファーアーに座つたのを確認し自分も反対側のソフ
アーに座りながら、金寺は本題を切り出した。

途端に、麻美の表情は技術士としての真剣なものになる。

「実は…本社で開発する事になつた織斑一夏専用機ですが、数週間
前に「自分に機体の開発の一部を任せてしまい」と篠ノ之束から連
絡がきました」

「何? 束から?」

予想外の名前が出てきた事に驚く金寺に対し、麻美もやや驚いた
ような顔になる。

「…お知り合いで？」

「一応な。で、続けてくれるか?」

「あ、分かりました。それで、その篠ノ之束が一時期機体を直に引
き取り開発し、先日本社に届いたのですけど…その基本システムが
とてもなく複雑なもので…正直、私たちの手におえないんです」

「…束から何か説明は?」

「新システムを組み込んだ、って。それだけで…」

麻美からの説明を一通り聞き終え、金寺は視線を落として考え込むような動作をする。

新システム。その単語がやけに心の隅に引っかかる。

世界最大手の倉持技研の社員ですら手におえない新システム。未知なる物なのか、それともブラックボックス化しているものなのか、金寺ですら想像は難しい。

それ以前に、何故「世界初の男性INS操縦者」のデータ採取にわざわざ新システムを搭載した機体を選んだのだろうか？
そこには篠ノ之束の思考が関わっているのだろうか？

考えれば考えるほど謎が出てくるが、今自分がやるべき事はぐだらない謎解きではない。

「…謎は放置しておこう。その機体はどこにある？」
「今から案内します」

金寺の要請を受けた麻美が、彼を機体のあるファクトリーに案内しようと立ち上がる。

脳内の隅で思考を働かせつつ金寺は彼女の後についていった。

倉持技研は、本社であるオフィスのすぐ隣にある大型のファクトリーの中に、多くの技術室が存在する。

織斑一夏専用機がある技術室は、ファクトリー内第八ブロックの28番室。第八ブロックの中の一一番奥にあり、人の気配はほとんど無かった。

「実はその織斑一夏専用機、元は本社の欠陥機だつたんです」

「どういう事だ？」

「言葉の通りですよ。…作つたはいいけど使い道が無い、といった類のだつたんです」

それ以外にも近況報告など軽い雑談をし、金寺は麻美に先導されて分厚い鉄の扉の前へたどり着いた。

「暗証番号を入力しますので、少しよろしいですか？」

そう一声掛け、金寺が後ろを向いたのを確認し首に下げているカードをスキャン。その後に指紋印象と網膜認証を行い、セキュリティを一時的に解除する。

程なくして、重たい音とともに鉄の扉が重々しく開き始めた。完全に開く前に二人は中へ入る。

部屋の中は、真っ暗といつてもいよいよ暗さだった。麻美が先

立つて数歩歩くと、生命認証が反応して薄暗い明かりが付く。

そして、“それ”が部屋の一一番奥に鎮座していた。

「これが…」

「はい、そうです」

金寺が声を上げるのを聞き、隣についた麻美がにっこり微笑む。

「これが、織斑一夏専用機…純国製第四世代型、【白式】です」

白。

そんな言葉が、まず金寺の頭に浮かんだ。

彼の目の前で眠っている白式は、その白い体を跪かせ、主に忠誠を誓う騎士のようだった。

だがそれよりも、金寺の興味を引くものがある。

「第四世代型、ねえ…」

最近になつて世界では第三世代型ISの開発、研究が進んできた。そんな中で机上の理論といわれている第四世代型ISが、いま田の前にあるのだ。

「それですが…第四世代型技術の展開装甲は、この機体の場合、武装にのみ使われていますので、完全な第四世代型ではないんです。正直、ネーミングは無理があると思つています」

苦笑氣味に事実を話す麻美。

「なるほどな… そんじゃ、その『新システム』とやらを見せてもいいませんか?」

「ふふつ、かしありました」

自分の知る限りをほど敬語を使わない金寺の、変わった一言に思わず笑みをこぼした麻美は、【白式】の近くに備え付けられているモニターを操作。【白式】のO/S及び基本性能を映す。

そこに表示される数々の文字。次から次へと情報が表示され、金寺がそれを一つ一つ的確に読み取り、理解していくと、

「…ん?」

数秒後、金寺の眉がピクリと上がった。

「あ、気づきました?」

金寺の顔色をうかがいつつ、麻美は再度モニターを操作し、金寺が反応したであろう部分を表示する。

そこに表記されている一つの文字_{モニタ}、金寺は絶句した。

始めて見たものではない。見覚えがあるとこ_{モニタ}レベルでもなかつた。

むしろ、彼の記憶にござりつつていても過言ではない。

“それ”は、ひときわ田立つ文字_{モニタ}でモニターに記されている。

1・封印われし（後書き）

早速白式の動力魔改造（苦笑）

この機体は、物語においてかなり重要なものになります。

2・姉（前書き）

前回の最後に出た謎の単語が、少し明らかになります。

ツイン・インフィニティシステム。

IISの中核である動力源、インフィニティ・コアを一基搭載しそれらを同調させることで、その機体の出力を、コアを一基搭載している機体の一乗にするといつもの。

だが、世界で“それ”を知るものは、僅か三人しかいない。

そして、金寺龍輔はそのうちの一人である。

その理由に関しては、IISでは割愛せてもらうが。

ともかく、ファクトリーの責任者 面識あり の許可をもらつた金寺は、早速【白式】の調整を開始する。

機体の基本スペックを確認していくと、ある事に気づく。

「近接格闘戦に超特化している…【暮桜】と同じ類か…」

【暮桜】。

織斑千冬が第一回IIS世界大会「モンド・グロッソ」にて搭乗し

た第一世代型EVAである。

一瞬、心中に懐かしい気持ちと複雑な気持ちが混ざり合つたが、金寺はそれを意図的に無視する。

よく見てみると、外見がかの有名な【白騎士】にも似ている気がしたが、どうせ機体の設計をチューインした人物の趣味だと思い、その考えも放置する事にした。

さて置き、倉持技研の面子と比べて、金寺はツイン・インフィニティシステムの扱いに慣れており、その特徴なども熟知している。そんな中で、一つの問題点が見つかった。

(同調率が高い…これでは機体性能を最大限に發揮する事は…)

このシステムで重要なのは、コア同士の同調率だ。

コアには一つ一つ個性のようなものがあり、そのものが意識を持つていてるといわれている。

そしてツイン・インフィニティシステムの力を最大限に發揮するには、そのコア同士が同調し、同調率が一定の値を超えないければ十分に性能を生かしきれない。

この、「コアの同調させる」というのが製作者曰く「実際に苦労に悩むもの」らしい、篠ノ之介は同調を前提としているコア同士

で試したが、全くと詰つていいほど回調しなかつたらしい。

実際、【白式】の場合はそれらと比べれば安定しているのだが、いかんせん不安定で性能を完全に發揮しきれる状態ではない。

明らかに欠陥機の域を出ておらず、そんな機体で大丈夫か、と思ってしまう。

しかし、いつも思う。

ツイン・インフィニティシステムの力は、ある程度閉じ込めたほうが良いのでは、と。

一つの「アーチ」ツインコアによって発揮される【白式】の真の力　もとい戦闘能力は、現行のHSと比べても相当なものになるだろう。

そうなれば、【白式】及び一夏が何らかの危険にさらわれる事は田に見えている。

篠ノ之束がそれを考慮しないとは金寺は思えない。
…だが、生憎彼女へ連絡をとる手段は無い。

よつて、この思考も一時的に脳内から放置する事にした。

思考回路を切り替えた金寺は、今やるべき事　【白式】の最終完成へ向けての作業を開始した。

「出張？金寺先生が？」

「その通りだ」

次の日の朝、HR終了後に千冬から「金寺は出張でいない」という旨の説明を受けた一夏は、思わず反射的に聞き返した。

正直、一夏にとっては困る。あれから少しずつHSの勉強をしてきたものの、未だに一夏一人では分からぬ点が多く、そのため金寺による補講の時間はとても意義のあるものだった。

だが、金寺が短期の出張に出たという事は、その意義ある時間が当分なくなってしまう。

「別に悪い事ばかりではないぞ。私との特訓の時間が多く取れる」

一夏の横で篠がそんな事を言っているが、実際一夏のHSに関する知識がまだ生半可なのは彼女にも若干原因がある。

篠のレクチャーは、大半が剣道の特訓。今後に控えるクラス代表決定戦に向けてはいいものかもしれないが、知識の面ではあまり良いものではない。

最も、一夏はそのクラス代表決定戦へ焦点をあわせているので文句を言つてはいけないが。

「でも、どうして今…」

「お前のためだ、織斑。アイツは倉持技研の依頼を受けて、お前の機体の最終調整を行つてゐるらしく」

「俺の、機体のために…？」

驚いたような一夏の一言に千冬は首肯し、千冬は軽く息を吐くと話を続けた。

「どうやら、お前の機体は向こう（倉持技研）でもてこられたらしい。まあ金寺のことだ、すぐに帰つてくるだらう。お前は来週の決定戦へ向けて自分なりに頑張る事だ」

それだけ言つと、千冬は身を翻しその場から去つていく。
その後ろ姿を、一夏は羨望のようなまなざしで見つめていた。

「…一夏？」

「ん？どうしたんだ？」

「…お前は変わつていないのでな」

呆れ半分羨ましさを半分、といった様子で呟く筈に対し首を傾げた一夏だったが、直後彼女の思考をある程度理解した。

それは十中八九、「姉」に関する事なのだろう、と一夏は推測する。

一夏も篠も、姉が一人いる。

互いの姉は二人と同じ様に幼馴染なのだが、その弟或いは妹が抱いている感情はかなり違つた。

一夏が姉 「織斑千冬」に抱いている感情は、「尊敬」である。

物心ついたときから、一夏にとって姉の千冬は絶対無敵の存在であり、常にその背中に追いつきたいと思つていた。

最も、傍から見ている篠にとっては、彼が『将来は姉と結婚したい』と本気で言い出しそうで正直不安なのだが。

篠が姉 「篠ノ之束」に抱いている感情は、「複雑」と表現したほうがいいだろう。

この世にエスを生み出した束は、間接的に篠 篠ノ之家が一夏と離れる原因となつた。

理由は、日本政府による「重要人物保護」という、極めて真つ当然のものだったが、当時小学生だった篠はいかんせん納得できなかつた。

よつて篠は、少なくとも姉の束に良い感情は持つていない。

だがそれは「憎悪」や「嫌惡」と訳されるものでもないため、「複雑」なのである。

最も、姉を引き合ごに出された事を極端に嫌がる」と考慮すれば、それは十分「嫌惡」に近いのかもしれないが…。

「…まあそうだな。それより、今日も特訓やるんだろ？…」
戻ってきたからさ、早く行け!」

「…つーわ、分かった…」

さわやかな笑顔で篠の手を握り剣道場へ向かおうとする一夏と、それに思わず顔を紅くする篠。

姉に対する感情は全く持つて違つが、それに一人の仲は関係ないよつである。

2・姉（後書き）

最近、評価が上がっていたりすると、何だかとても嬉しくなります。初めて感想をもらつたときは、本当に嬉しかつたです。

それ以降、読んだ小説には出来るだけ評価をしたり感想を書いたりするようになりました。

小説を書く身の気持ちが分かつたとでも言ひべきなんでしょうね。

指摘、感想お願いします。

3・戦闘田舞曲（前書き）

初戦闘。

戦闘描^画を書くのはとても樂しいです。本当に。

3・戦闘円舞曲

日が経つのは意外と早いものであり、ついに一年一組クラス代表決定戦の日が訪れた。

それにあたって、現在一夏は特注のEISースを身にまとい、許可をえた筈、千冬とともに第一アリーナの第一カタパルト内にいるのだが…。

「あの…織斑先生…？」

「なんだ」

「俺の機体は…」

「…私に聞くくな」

一体どういうわけか、一夏の専用機が到着していないのだ。

おまけに金寺からも連絡は一切無い。すなわち、彼らは現状を全く把握できておりずどうしてよいかも分からないのである。

訓練機である【打鉄】を準備すべきか。

千冬の脳裏にそんな考えがよぎったその時

『お、織斑先生…』

第一カタパルト内に、第一アリーナ総合管制室にいる真耶の声がスピーカー越しに響いた。

『来ましたよ、織斑君のT.Sが!』

「本当か!?」

待ちに待つた知らせを聞き、思わず千冬は声を張り上げる。それと同時に、カタパルトの重い扉が開き、そこから一つの大きめなコンテナとそれを引く一人の青年が姿をあらわした。

「　　悪い、待たせたな」

一夏たちの目に映った“片手でコンテナを引っ張っている”その青年こそ、金寺龍輔である。

「せ、先生…？」

「馬鹿者、連絡もせず一体今まで何をしていたんだ?」

その光景に呆然としている一夏と箸を尻目に、焦燥からか、千冬は思わず苛立ちを含んだ声を出してしまう。

「黙れ。俺だつて油を売つてたわけじゃねえ。…それはともかく、時間は無いようだな」

千冬の言葉を一蹴し、金寺は大型モニターへと目線を向ける。そこには、既に自身の専用機を身にまといアリーナ上空にいるセ

シリア・オルコットの姿があった。

「…仕方がねえ。フォーマジック初期化と最適化処理は戦闘中にやるか。…さて、
こいつがお前の相棒だ」

そう結論付けた金寺はコンテナのハッチを開くためにコンテナ備え付けのコンソールパネルを操作する。

コンテナが重々しい音を立てながら開き、中にあるIISが姿を晒す。

「これが…」

奇しくも、それを初めて目に収めた瞬間に出了声は、金寺と同じだった。

「ああ、こいつがお前のIIS…【白式】だ

びやくしき

コンテナが完全に開き、主に忠誠を誓つよつた白き機体が、三人の目に入る。
機体を司る飽くなき白は、彼らから言葉を失わせるのに十分だ
った。

「よし、一夏、時間が無い。早急に装着を済ませるぞ」

「…分かつた」

若干せかすよつた千冬の言葉を聞き、静かに【白式】へ触れた一夏は、

頭蓋内に、半瞬鋭い痛みを感じた。

「 つー？」

コンマ〇・一秒。前触れ無しに襲い掛かってきた痛覚に、一夏は思わず頭を押さえてその場につづくまりそうになる。

「どうした一夏！？」

「…いや、なんでもない」

それを見た筈が心配そうに尋ねたが、一夏は極力表情を崩さず、
【白式】から手を離さないまま答えた。

「…もしかしたら、一瞬脳が情報量に耐えられなかつたんぢゃない

のか?」「

「Jの一部始終を見ていた金寺が、そんなことを呟く。

「Jには、今までのHSとは一線を越えてるからな」「どういう事だ?」

千冬の質問に答えず、金寺は一夏に一つ質問をした。

「一夏。…初めてHSに触れたときに、今みたいな痛みは来たか?」「…いや、なんとも…」

それを聞いた金寺は満足そうに話題を切り上げた。

一方、一夏は不思議な感覚にとらわれていた。

先ほど一瞬感じた、脳内に剣を突き刺すような痛みは消え、今は膨大な情報が頭の中に流れてきた。

それも、試験場で成り行きで触れたときは全然違う。その時とは比べ物にならない情報量が頭の中に流れ込んでいるにもかかわらず、何故か“それ”を自分は全部理解できていた。

それだけではない。

一夏の頭の中に、何かのビジョンが流れ込んできた。

「何だ?」

田が回つそうになる一方で、ビジョンが鮮明になっていく。

蒼い空に浮いている自分、数えるのもバカバカしいほど多い“何か”が向かってくる…

競技場か？ 前方にIDSがいる。“それ”に自分が猛スピードで迫っていく…

（）で、ビジョンと情報の奔流が終わつた。

「…大丈夫か？」

千冬の声に、小さく「クリと頷く事しか一夏は出来ない。

猛烈な違和感が、彼の意識を支配していた。

「だつたらいい。ひとつと装着を済ませるぞ」

金寺が言うと【白式】の装甲が開き、搭乗者を認めたように受け入れる姿勢をとった。

ぎこちない動作で装着を行うと、彼を受け入れるかのように開いた装甲が閉じ、一夏はまるで自分の体と【白式】が融合していくような感覚にとらわれた。

「背中を預ける。そりだ、座る感じでいい」

指示を受けながら、一夏は準備を進めていく。

A
c
c
e
s
s
.

「後はシステムが最適化する」

S
e
t
u
p
s
t
a
r
t
.

人口音声と共に、セットアップがオートで進行。

そして、一夏は前方のモニターに提示される情報に目を通し、そ

の名を見つけた。

白式・

表示される空間投影モニターが無数に表示されでは、消えていく。その空間投影モニター越しに、総合管制室にいる真耶が一夏に確認を取る。

『 IISには絶対防護と言つ機能があつて、どんな攻撃を受けても、最低限、操縦者の命は守られるようになつています。ただその場合、シールドエネルギーは極端に消耗します。わかつてますよね?』

絶対防護。

IISには、どれほど追いつかれても、パイロットの生命は維持できる装置がある。

最も、金寺はそのよつなものを信じ込んでいないが。

(相手は……)

|画面左上に表示された、敵方の情報。

名称 【ブルー・ティアーズ】。

『セシリ亞さんの機体は、【ブルー・ティアーズ】。遠距離射撃型のHSです』

真耶の説明を聞いている最中に、【白式】が一夏に同調し、一夏を理解していく。

「これが……俺のHSになつたのか…」

体に馴染んでいく様を感じながら、一夏はふと呟く。

「一夏、 いけるか?」

千冬のかけた言葉に一夏は首肯し、カタパルトの足場に乗る。

「それと、戦闘中は常に戦況を把握している。焦らず、慌てず、自分の勝負に持ち込め。私がお前に言えるのはこれぐらいだ、一夏」

姉の頼もしい言葉に、一夏は思わず笑みをこぼした。

田の前で開いていくカタパルトハッチを見つめると、その先には、青空が広がっていた。

これから自分があそこへ向かつて飛び出して戦闘を行つと思つと、よく分からぬ緊張感が伝わってくる。

「第…行つてくる」

「ああ…勝つて來い」

横にいる篠との短い会話を終え、そして、意識を前方に広がる快晴の青空に向ける。

「…よし、行きます！」

一夏がそう言つと、足場が大きく前方へ滑走。スラスターを噴かせた【白式】をカタパルトから射出する。

「よいよ、実戦だ。

背中の四つの噴射口で姿勢制御を行い、既に空中で待機していた
敵

セシリア・オルコシトと向き合つ。

「あら、一応来ましたのね」
「来ないとでも思つたか？」

自身満々と言つた風で言葉を紡ぐセシリア。
その瞳は、確実に自身の勝利を確信している田代だった。

「さて置き、先日貴方は『手加減は要らない』とおっしゃいました。
…発言を撤回しようとは思いませんか？」

「…今更前言撤回するわけ無いだろ」

真正面から反抗の姿勢を表した一夏を、セシリアは鼻で笑う。

第一、セシリアは右手の主武装のセーフティを既に解除している。最初からやる気満々のようだった。

「そう……それはそれでよい心掛けですわ。それなら……」

その言葉と同時に、セシリアは右手に携えている大型のスナイパー・ライフルを構える。

一瞬遅れて、ディスプレイに赤い枠の警告文が現れた。

警告 敵IS、射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾
エネルギー装填

(敵IS、射撃体勢に移行……来るか！)

「遠慮なくいかせてもらいます！」

全体のサイズに反して、長い銃身を持つたその兵器
口径高エネルギーレーザーライフル『スター・ライトMK?』から、
青白い閃光が飛び出した。

まさに間一髪。

一夏が彼女の奇襲攻撃を予測していた事もあり、直撃という無様な事態だけは避けられた。

しかし、僅かながら光条は【白式】の装甲をかすり、シールドエネルギーを削る。

流石の一夏もその場にとどまるような真似はせず、更に光線が放たれるのを確認した後加速して回避行動に移った。

「さあ、踊りなさい。わたくしセシリ亞・オルコットと【ブルーティアーズ】が奏でる円舞曲で…」

間髪おかずにしてのようなことを言いつつ、セシリ亞は《スターライトモード》による狙撃で一夏を翻弄していく。

一夏もそれを避けようとアリーナを飛び回っているのだが、操縦者の技量の差ゆえか直撃ないしかする事が多かった。

しかし、このままでは埒が開かない。遠方から来る敵弾を避け続けたところで、そこに一切のチャンスはなく、それは出来の悪い芸にすらなり得ない。

「クソッ…何か武器は…！」

回避行動の最中ながらも、何とか反撃に転じようと一夏は【白式】^{ブリセット}の基本武装を確認したが、

「つてこれだけかよ…」

一夏が素つ頓狂な声を上げたのも無理は無い。

【白式】に搭載されている基本武装は、近接特化ブレード一本のみだった。

(…でも、やるしかないな。…来い…)

そう念じた一秒後、一夏の右手の中で淡い光がはじけ、近接特化ブレードへと姿を変える。

柄から刃まで薄い灰色なそれは、形状が日本刀に似ているような気がした。

ともかく、その刀を片手に、一夏は狙撃をかいぐぐつてセシリ亞に接近しようとする。

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘型の装備で挑もつとは……笑止ですわっ！」

そんな事は一夏も百も承知だ。

いまだに降り注ぐ青白い光条からは完全に逃れられず、シールドエネルギーもかなり減少してきているが、戦闘開始直後と比べれば彼が操縦にやや慣れたという事もあり被弾数は減少している。

だが、それでもシールドエネルギーは既に四割近く削られている。一夏としては懐に飛び込んで早めに決着をつけたいところだ。

少々焦り始めた彼の脳裏に、戦闘前の千冬の言葉が響く。

『常に戦況を把握していく。焦らず、慌てず、自分の勝負に持ち込め』

「危なかつた。

もしこの言葉を思い出さずに無理にでも彼女の懐に飛び込んで行つていたら、自分は間違いなく墮ちていただろう。

その証拠に、

「この【ブルー・ティアーズ】を前にして初見でここまで耐えたのは貴方が初めてですわね。でも……そろそろフィナーレと参りましょう！」

【ブルー・ティアーズ】の腰背部のサイドバインダーが四つに分離し、その先端から《スター・ライト^{マーク}》と同じように青白い光条が飛び出していた。

これが、【ブルー・ティアーズ】の機体名にもなっている**兵装**第三世代型・自立機動ライフルビット《ブルー・ティアーズ》。操縦者の思考制御によって、オールレンジ攻撃を行つ無線機動兵装だ。

それらが一夏の周囲を自由自在に飛び回り、彼の死角からビームを放つ。

一夏は何とか見極め避けようとするが、四方から迫つてくる光条に早々対応できるわけも無く。

背後から、ビームによる奇襲を受けた。

「ぐうっ……！？」

苦悶の声を漏らしながら、一夏は後退。シールドエネルギーも大幅に削られる。

「あら、耐えましたのね。中々頑丈なようで何よりですわ」

意外そうな声をあげるセシリ亞の声も、余裕が一切無い一夏の耳には入らない。

しかし、

(……ん?)

何かが、一夏の心に引っかかった。

四方八方から来る光条をよけるのに精一杯なのに、何か「違和感」を覚えた。

そして彼の視線が『ブルー・ティアーズ』を操っているセシリ亞に向いたとき、「違和感」は明確な「疑問」へと変わる。

(どうしてライフルで撃つてこない? 今なら俺を確實に狙い撃てるはずなのに…)

『ブルー・ティアーズ』がアリーナ上空を駆け巡っている間、セシリ亞はほとんどその場から動いていない。

そして、不意に《ブルー・ティアーズ》による射撃が止む。セシリアが《スターライトmk?》で狙撃を開始したのは一度そのときだった。

当然回避。

直撃コースから外れ、再び思考を開始する。千冬の言葉が脳裏に残っていることも幸いし、冷静に一夏はそれについて考えてみることが出来た。

少々の思考の末、たどり着いた一つの結論。

(…まさか)

それを確認するため、一夏は意を決し、彼女の懷へ飛び込む機会をうかがう。

飛来する光条を避けて、避けて、避けて。

そして、そのときが来た。

ほんの一瞬、《ブルー・ティアーズ》による射撃が、ピタリと止んだのだ。

今だ！

キツとセシリ亞を見据え、一夏は今の【白式】が出せる最高のスページで彼女へ向かっていった。

それを見たセシリ亞の表情が、青くなっている。

「 ティアーズ！！」

プライドをかなぐり捨てたような素つ頓狂な声をあげながら、セシリ亞は狙撃体制に移るのを止め、再び《ブルー・ティアーズ》に指示を出す。

その青白い光条に阻まれ、結果的に一夏の奇襲攻撃は失敗したものの、彼の「疑問」は「確信」へと変わっていた。

(やつぱりな。彼女はあのビット兵器と狙撃を同時に行えない！)

実際のところ、一夏の確信は見事に的をいている。

ビットの思考制御にはかなりの集中力が求められる。イギリス国内でBT兵器の適正が一番高いセシリ亞・オルコット それが、彼女がこの学園に来た理由である ですから、ビットを操作する

際には思考制御に集中してしまい他の動作が一切出来なくなる。

一見無いように、あつた僅かな隙は、それだけではない。

一夏の動きを見たセシリシアは、咄嗟に四基の《ブルー・ティアーズ》で弾幕を張り、一夏の接近を阻もうとする。

「一つ覚えですね！」

先ほどと同じように、蒼白いフレームが網のよつに張り巡らされ、一夏に襲いかかる。

四方八方からの接射に、一夏はなす術もなく散る。

はず、だつた。

「そこだつ！」

刹那、《ブルー・ティアーズ》の内の一基が、爆煙と金属片へ姿を変えた。

横に振るった近接特化ブレードの一閃が、的確に一基の《ブルー・ティアーズ》を捉えたのだ。

予想だにしない事態に、セシリアの目が驚愕に開かれる。

「見切つたぞ！《ブルー・ティアーズ》！」

一夏は気付いた。

自由自在に動き回るレーザービットが、常に一夏の“死角だけ”を狙っている事を、見切つたのだ。

《ブルー・ティアーズ》の射線は、一夏の反応が一番遅くなるところから放たれている。

それは、気付かなければ死角だが、気付けば死角でも何でもない。ただの動き回る的だ。

一瞬であれ硬直をさらしたセシリアを、一夏は見逃さない。

完全に《スターライトmk?》と《ブルー・ティアーズ》の射線が止まつた一瞬の隙を突き勢いよく接近。

自分の距離に持ち込み押し切るべく、刀の斬撃をセシリアに向け

て振るおつとして

「かかりましたわね！」

【ブルー・ティアーズ】の腰部に装着されている銃口が、一夏を捉えた。

背後に、悪寒が走る。

「《ブルー・ティアーズ》は六基ありますよ！」

そう。

《ブルー・ティアーズ》は、四基のレーザービットだけでなく、一基の弾道ミサイルビットも兼ね備えているのだ。

彼は完全に油断していた。

放たれた弾道ミサイルから簡単に逃れる事が出来るわけがない。

そして。

【白式】が。

一夏が。

白銀の光に包まれた。

3・戦闘舞曲（後書き）

指摘・感想をお願いします。

次で『封印解除』は終わりです。

4・シインインハイパータイプ（前書き）

今回で『封印解除』は終了です。

4・ツインインファーティシスシステム

「一夏あつーー。」

第一アリーナ総合管制室にて。

モニターに映る一夏を包み込む爆発に、筹が悲鳴に近い声をあげていた。

この光景を見れば、一夏が撃墜されたと思つだらう。だが、

「…全く、タイミングが良すぎじゃねえの?」

「確かにそうだな。まあそれも、勝負師としての実力の内だらう」

あらうひとか、金寺と千冬はのんきにそんな事を呟いていた。

だがそれは、まだ一夏が健在である事を確信しているからに他ならない。

「 終わったぜ、^{フォームアート}_{初期化}と最適化処理。^{フィットティング}_{封印解除}”の時間
だ」

爆煙が晴れた場所に、それはいた。

それは先ほどまでの【白式】とは少々違う。

各部装甲が全体的にスリムな形状となり、両腕並びに脚部の装甲
にブレード状の突起が付く。

背部の一基の大型ウイングスラスターは、大型の噴射口が一つと、
補助の小型の噴射口が一つ付き、全体で四つの噴射口が露になる。

先ほど【白式】を包み込んでいた白銀の光が細かな粒子となり、
その全身を覆っている。

そして、その空間投影モニターに映る、初期化フオーライズと最適化処理ファイナライジングの終了を告げる文。

ツイン・インフィニティシステム搭載機、【白式】が、本当の姿を見せたのだ。

「まさか、一次移行！？今まで貴方、初期設定だけの機体で戦つていたといつの？」

上空のセシリアが驚愕をあらわにしていたが、一夏は大して気にとめなかつた。

試しに腕を動かし、近接特化ブレードを少々振つてみる。
なるほど、どうやら完全に【白式】が一夏のものになつたという事もあり、先ほどよりは反応速度が早くなつてゐる気がした。

空間投影モニターに田を通すと、ある事に気づいた。

表示されている【白式】の唯一の基本武装。それは先ほどまでは

ただの「近接特化ブレード」だったのだが、その名称が変わった。

刀の名は 『ゆきひらひ雪片式型』。

(今まで守られてるだけだった…けど、もうそれも終わりだ)
はあ？貴方、何を言つて

心中でそう独語した時、何故か頭蓋内にセシリアの声が響いたが、
今の一夏の意識はそれらへは向いていなかつた。

正直、自分は千冬姉に頼りすぎた気がする。

揃つて親に捨てられたにもかかわらず、自分ひとりで養おうとしてくれた。

食費、学校費、生活費。全て姉が稼いでくれた。

いつしか姉に頼つてばかりの自分が嫌になり、「迷惑を掛けすぎている」と引け目をとるようになってしまった。

最も、当の本人は迷惑などこれっぽっちも思つていらず、
それが当然と言わんばかりなのだが。

だからこそ、中学校三年間はほぼ一年中アルバイトに励み、少し
でも姉の負担を軽くしようとしたのに

もう自分は、受身だけの人間ではない。

「これからは俺が 僕が千冬姉を、家族を、守つてみせる。」

自身の決意を如実に表した言葉。

それが、一夏の「理想」であり、「願い」であった。

実体剣だった《雪片式型》が、眩い光を放つビームソードを展開する。

先ほどと比べても段違いな速度を出し、一夏は【ブルー・ティアーズ】へ向け突進していく。

(【白式】が俺に応えてくれたんだ…！俺が【白式】に応えないで
どうする…)

それにセシリ亞も反応。遠距離戦からの弾幕展開を試みようとする残った三基の《ブルー・ティアーズ》を自身の周辺に停滞させ、援護を受けながら一心不乱に連射する。

【白式】も、そこまでエネルギー残量があるわけではない。

塵が積もれば山となるように、シールドエネルギーは戦闘開始直後から減り続けていて、既に半分以下になっていた。

例えかすっただけでも、今の【白式】にとっては致命傷になるか

もしけない。猛突進するのを止め、丁寧かつ大胆にスラスターを噴かし、ビームの射線を避け、接近する機会を狙う。

ここまで撃ち続ければ、やがて疲弊する瞬間が訪れる。
狙うは、秒にも満たぬその好機。

そして。

『ブルー・ティアーズ』の一機が、不意に射撃を止めた。

同時、【白式】が淡い白銀の粒子につつまれる。

ワントップ・アビリティ
单一使用能力『零落白夜』・発動・

一夏は再び、ビームによる猛攻の中へ身を沈める。
道を塞ぐ光弾を避け、襲い来る弾丸にかすり、一夏はついに、セ
シリアの眼前へ躍り出た。

この距離ならば、『雪片式型』の一難ぎが届く。
逃してはならない、千載一遇の機会。

しかし。

「忘れたとは言わせませんわよー」

再び、腰背部のミサイルビットの銃口が、目前の一夏を捉らえた。再び放たれる、計四発の弾道ミサイル。

それに対し、一夏は。

急上昇。

決着をつける機会を得てもなお、一夏が打ったのは逃げの一手だった。こうなることを予想していたかのように。

「？」

そして、一夏は急降下。体にかかる慣性をものとせず、畳に下
降したのだ。

セシリアはそれを見て迎撃態勢に入るが、上方を見上げた瞬間、太陽光が目に入る。

既に一夏は、必殺の態勢に入っていた。

が。

警告 インフィニティ・コア臨界点突破

無機質かつ不吉なアラート音が、一夏、セシリア、金寺、千冬、
篠、真耶の耳に響いた。

『…なんだ？』

間の抜けたような一夏の声が総合管制室に響いた次の瞬間、何の前触れもなしに【白式】の左翼ウイングスラスターが小爆発を起した。

「織斑君？！」

「一夏つ！？」

真耶と篠が悲鳴を上げる。

左翼部から煙を上げた【白式】は、機体制御ができないらしく徐々に落下していった。

このままでは、何か嫌な事が起きる。

それはこの場にいる全員　特に金寺が思っていた。

「試合中断！セシリ亞・オルコット、一夏を救出しろ！」

即座に通信回線を開き、金寺がセシリ亞に対して声を飛ばす。

彼女は一瞬驚きを露にしたが、軽く頷くとスピードをあげて降下。

高度を下げていく【白式】の腕を掴み、何とか落下を阻止する。

『…大丈夫ですか？』

『俺は…でも機体が無理みたいだ。…ありがとうございます』

『いいえ、どう致しまして』

現在、管制室のモニターには、【白式】の空間投影モニターと同じ事が表示されている。

そこには依然、《警告 インフィニティ・コア 臨界点突破》という紅い文字が表示されていた。

「臨界点突破…オーバーロード？一体どうこう意味だ？」

口元に手を当てて、考え込む千冬。

その横で、盛大に金寺が溜息をついていた。

実際のところ、金寺はこの事態をある程度予測できていた。それゆえ、代表決定戦のギリギリまで技研で調整を行っていたのだがしかし、起きてほしくないという彼の切実な願いは完全に空回りしてしまったのだ。

「アイツは…」

金寺の呆れにも近い怒りは、この場にいないそもそも所在不明のある人物に向いていた。

結局、今日の試合は無効試合となり、【白式】の修復が終了次第

また試合を行ひ、といふ事になった。

そしてその日の夕刻、第一アリーナの第一カタパルト内にて、金寺が一夏と千冬に対してもざまな説明を行つてゐた。

「そもそも何故、【白式】のコアがオーバーロードを起したんだ？」

至極真つ当な千冬の質問を聞き、金寺は【白式】の基本スペックをカタパルト内の大型モニターに表示する。

「問題の根源は、【白式】の稼動システムにある。…「ツインコア」これを聞けば大体分かるだろ?」

「ツインコア?…まさか!…」

千冬の眼が、驚愕に見開かれ、金寺が静かに頷く。対する一夏は話についていけず、新たに質問をした。

「あの…ツインコア、ってなんですか?」

一夏の質問に答えるために、金寺はモニターを切り替える。

表示されたのは、【白式】の画面の翼部に田状のメーターが現れているもの。

それの両翼部分に表示されている丸型メーターを、金寺が指差す。

「言葉の通りだ。【白式】は二つのコアを一つのHSに搭載している。俺たちはそう言うのをツインコアと呼んでいるが…その二つのコアを制御してるのが『ツイン・インフィニティシステム』だ」

「…『ツイン・インフィニティシステム』…？」

よく理解できない、といった表情の一夏を見つつ金寺は説明を続ける。

「『ツイン・インフィニティシステム』がツインコアを制御・同調する事により、生成されるエネルギーは一倍ではなく一乗になる」

「まだに首を傾げる一夏に、嘆息しつつ千冬が具体的に説明する。

「例えば、一つの『アの生成するエネルギー量を10とする。これが単純に一倍だ、と生成されるエネルギーは20だ。しかし、『ツイン・インフィニティシステム』によってツインコアが同調すると、生成量は一乗化つまり…生成されるエネルギーが100になる。『ひや、100！？』って事は、機体性能がすごい事になるんじゃ…？」

「この例えで一夏も大体理解したらしく、思わず声を上げさせていた。

それに頷いた金寺だが、「だが問題点がある」と言いつつモニターを切り替える。

「この機体の場合、過剰に生成されたエネルギーの大半は、機動力と攻撃力に回っている。シールドエネルギーに関してはあまり効力は無いな。それに、『ツイン・インフィニティシステム』を完全に稼動させるには、ツインコアの同調率が大事になるんだ」

「同調？」

「ああ。『アは個別に個性みたいなものがあつて、それぞれに意識があるといわれている。まあ現実そんなんだろうが、だからこそ同調させるのは至難の技なんだ。最初から同調を前提にして『アを作れば問題ないが……今【白式】に搭載されているツイン『ア』は、こいつを改造した野郎曰く『既存の『ア』の中では一番良い組み合せらしい』

「こいつを改造した野郎……？」

「【白式】は元々、倉持技研内で放置されてた欠陥機だったらしい。それを篠ノ之束が引き取つて魔改造。そんでもつて今ここにあるわけだ。ちなみに俺が出張していた理由は、こいつの最終調整のためだ。何とか同調を安定させようとしたんだが……上手く出来なかつた」

一夏が溜息をつく金寺の顔をよく見ると、僅かながら田の下にくまが出来ていた。

金寺が出張に行つたのは一週間前。となると、ほぼ一週間通してほとんど睡眠もとらず【白式】のツイン『ア』の調整を続けたのだろうか。

そう思つと、とてもありがたいし、とても申し訳ない。

「気にはすんな、機械弄りは趣味の一つだからよ」

一夏の思つた事が表情に表れていたらしく、表情を変えずに金寺が彼にしか聞こえないようにぼそりと呟く。

「そうすると……先の戦闘でのオーバーロードは、このツイン『ア』が原因、という事になるな」

モニターを眺めつつ、千冬が小爆発の原因を推測する。

金寺はそれに首肯すると、モニターに戦闘のVTRを映す。

その下には、ツインコアの同調率が表示されていた。

戦闘開始直後は、52パーセント。

「…完全安定領域は大体65パーセント以上だ」

その後も同調率は不安定で、53から58パーセントを前後する。この間に一夏が『ブルー・ティアーズ』の内の一基を叩き斬ったが、そのときの同調率は58パーセントだった。

そして弾道ミサイルが命中する直前、突如同調率が跳ね上がった。同時に、【白式】の周囲に淡い白銀の粒子が舞う。このときのツインコアの同調率は、

「68パーセント！？」
「フォーマット ファイット初期化と最適化処理終了したのと同時だな…」

どうやら、完全に【白式】が一夏のものとなつたのと同時に、同調も安定するようになつたらしい。

場面は変わり、一瞬の隙を見つけた一夏が、セシリアの懷に飛び込んでいく。

セシリアは弾道ミサイルを放ち迎撃したが、一夏は急上昇する事で即座にそれをよけ、即座に急降下して必殺の一撃を食らわそうとする。

そして、ツインコアがオーバーロードを起こし、【白式】の左翼が小爆発を起こす。

「アの同調率が完全安定領域に到達して以降の戦闘の様子を見た千冬は、こう分析した。

「機体の機動力もツインコアの同調率と正比例するようだな。一夏が急上昇と急降下を行つたときは同調率が70を超えていた…」

あの瞬間、ツインコアの同調率は右肩上がりに上がつて、最終的にこの戦闘での最高同調率は、73パーセントだった。

その最高同調率を記録したのは一夏が急上昇から急降下に転じた直後であり、次の瞬間ツインコアが負荷に耐えられずオーバーロード起こし、同調率は恐ろしい勢いで下がつていったのだが。

「…結局いまだに欠陥機なんじゃ…」

一通り事を理解した一夏は、現在右手首にて待機形態 ガン

トレットとなつている【白式】を見つつ呟いた。

一夏の述べた事実に、カタパルト内を嫌な沈黙が支配する。

それを壊すように盛大に嘆息した金寺が、メモリースティックに【白式】の全スペックをコピーした。

「一応、安定させるための後付装備でも造つてみるわ。それまでちよつくり辛抱してくれよ」
「わかりました」

ひつやうり、金寺龍輔の悩みの種は少しあつ無い。

それから数時間後、ヤシニアは浴室でシャワーを浴びていた。

白く透き通った肌と、整ったプロポーションは、年相応でない大人の女性の色気を感じさせるには十分である。

先の戦闘からすぐシャワールームに入つたのは、戦闘でかいした汗以外に、自分の中でもうすめく不思議な感情を洗い落としたかったからなのだろうか。

正直、本人にも分からぬ。

(…………何故、こんな気持ちになるのかしら)

それはとてもめまぐるしくて、訳が分からず、だからといって簡単に放置していいようなものではなかつた。

(……私が、負けそうになるだなんて)

セシリアはそう認識していた。
もし、彼のＩＳが不具合を起こしていなければ、確実にあの太刀筋で敗北していた。

手加減はいらぬからな。

：今更前言撤回するわけ無いだろ。

セシリアは、一夏の言葉を真に受けていた。

手加減せずに、力の差を見せてやる、といわんばかりに全ての力を出し切つて、策略を立て、駆け引きを行い、負けそうになつた。

納得できるわけが無い。

勝とうが、負けようが、白黒はつきりしたいと思つ。

それに、

これからは俺が　　俺が千冬姉を、家族を、守つてみせる！

彼のISが白銀の粒子を帯びていたときに、聞こえてきた決意。それが彼の本心である事は、何故かすぐに分かつた。

彼 織斑一夏の瞳に宿っていた信念の光は、自分の父親と正反対だった。

セシリア・オルコットは、イギリス国内でも有名な名門貴族のお嬢様だ。

その母は、尊敬に値する人物だつた。

ISが発表される以前から、名門家の主として、様々な会社を経営し、数多の成功を収めてきた。

厳しくも、凜々しいその姿は、幼かつた少女が憧れを抱く対象だった。

逆に、父は尊敬に値しなかつた。

簡単に言えば、セシリアの父親は、婿入りした男だつた。

常に母の機嫌を気にし、常に媚びるような真似をしてきた父親を見ていた少女が、『将来、情けない男とは結婚しない』といった感情を抱くようになったのは、ある種当然の成り行きだつたのかもしれない。

だが、それも全て過去の話。

三年前、イギリス国内で、大規模な列車横転事故が起きた。

この、未曾有の事故の死亡者は400人以上にのぼり、その中に、オルコット夫婦はいた。

一部では、無差別テロなのではないかといわれているが、事件現場が悲惨すぎるゆえ捜査もそれほど行われず、事故として処理された。

最も、何故その日に限って別居状態だった両親が一緒にいたのか不思議だつたが。

それ以降、セシリ亞・オルコットの日常は大きく変わった。

両親を亡くし、残ったのは、莫大な財産のみ。

当然の如く、それにつられた者たちが、彼女に群がつてくる。

それを避けるため、勉強に勉強を重ね、汚い大人たちから遺産を守ってきた。

物だった。

ISの適性検査でAが出たのは、その中の偶然の産

結果的にそれが功を奏し、財産・国籍保持を条件に、彼女は国家代表候補生になつたのだが。

そして、BT兵器のデータサンプリングのために日本に来た彼女は、彼と出会つた。

最初は、いくら成り行きで入学する事になつたとはいえ、ろくな
学ぼうともしない彼に失望していた。

しかし最近は積極的に学ぼうとする姿勢が現れて、自分の元に勉
強を教わりにくることもあった。

(……織斑一夏は、違うのかもしれない)

そして、今日。

セシリアは、一夏の決意を聞いた。

強き志を持つ一夏の中に、セシリアは、自身が求める何かを見つ
けたような気がした。

(……知らなければ)

もつと、彼のことを。

4・ツインインハイ-テイシスistem（後書き）

さて、第一章終了です。

セシリアにまだフラグは立ちません。本作の一夏は、じっくり時間を立ててフラグを建築していきます。
それゆえ無効化される人物も出てくるわけですが、それはまた後の話。

次章では、セシリアとの再戦と【白式】関連を中心にしていきます。

指摘・感想があれば、宜しくお願いします。

1・関係（前書き）

新章開始。

若干金寺が空氣ですが、今はまだ裏で一夏をサポートする役割なので仕方ないです。

「 というわけで、クラス代表決定戦は一週間後にまた行う」

三日後のSHRにて、千冬はクラスの面々にその旨を伝え、帰りの号令を済ませた後一夏を呼び出した。

「一応、金寺がお前 もとい【白式】の専属整備士に付く事になつた。何かIS関連で分からぬ事があれば遠慮なくあいつに聞け。金寺は、頭脳の面に関しては私をはるかに超越しているからな」

それを聞いて頷いた一夏の元に、一人の生徒がやつてきた。

「一夏さん、少しいいですか？」

「オルコットさん…」

その生徒は、先日戦った相手、セシリ亞・オルコットだった。

「機体の方は大丈夫ですか？」

「ああ、それをこれから確認しに行こうと思つて。なんか俺のISは特別みたいださ。それより、オルコットさんのほうは…」

その続きを言おうとして、一夏はセシリ亞に制された。

「わたくしなら万全ですわ。後、わたくしの事は名前で呼んでも構

いませんわ。それと、

やうやく、セシリアはまっすぐと一夏を見据え、はつきりと言つ。

「 次こそは、白黒つけましょ。お互に全力を出して、一夏さん」

それは、戦士としての正々堂々とした宣誓だった。
これが、彼女があの戦い以降ずっと思つていた事。

織斑一夏と勝負のけりをつけたい。

セシリアは一夏を見据えつつ、手を差し伸べる。
その意思が、一夏にもまっすぐ伝わったようで、

「…ああ、分かつてゐる。今度こそ勝負をつけよつて…セシリア！」

快く、握手に応じた。

この光景を見て、一部の生徒が一人に拍手をしていたが、それは

また別の話。

一週間後。

グラウンドに集合した一年一組は、五列隊形で並んでいた。“休め”の姿勢で待機している中、男子は一夏だけである。

この状況、正直一夏はきつい。

今、一夏を含めた一組の面子は、全員IISスーツを着ていた。

スクール水着、と例えられても不思議ではないIISスーツの主な役割は、操縦者の微弱かつ纖細な体内電気信号を読み取って、それをリアルタイムにIISの各部位にダイレクトに伝達する事だ。

それ故、余計な装飾はいらないので、しっかりと体のラインが忠実に現れるのである。

つまり。

織斑一夏は現在、水着少女の集団の中に、男一人放り込まれているような状態だった。

「では、これよりIISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう」

五列隊形の先頭にいる千冬が、ぞっとメンバーを見渡す。

「織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

「わかりましたわ」

その声と同時に、列から一歩前に出たセシリアの耳につけた青いイヤーカフスが淡く発光する。

周囲一帯が光に包まれた瞬間には、彼女は【ブルー・ティアーズ】の装備を終えていた。

先日ライフルビットを一基失った【ブルー・ティアーズ】だが、金寺の早業によって数十分で元通りになつたらしい。

「織斑、お前もだ」

思わずセシリアに見入っていた一夏は、千冬の声で我に帰り、自分もISを装着しようと一歩前に出る

ちなみに、【白式】を装備するのは、今回で三度目である。

(行ぐぞ、相棒)

目を瞑り、意識を右手首のガントレットに集中する。

反射的に構えた右手首のガントレットにある白金の半球から、二つの光のリングが出現し、一夏の体を包み込む。

その過程まで0・8秒。一夏は【白式】の装着を終える。

じ。

(うつ！？)

頭蓋内に、何かのビジョンが浮かび上がった。

先日のように痛みや眩が回りそうな感覚は無く、またしても一夏はそれを読み取る事が出来た。

手元から飛び出す粒子ビームが、次々と迫り来る黒い
物体を打ち落としていく。

血らの振るつた剣の太刀筋が、至近距離にいるエリスを命中している。

「……で、ペジヨンが終わつた。

ちなみに【白式】のほうも、修復などは某専属整備士の早業によつて完全に完了している。

一人が無事成功したことを確認してから、千冬が声を張つた。どうやら、一夏が若干ふりついたのは気づかなかつたらしい。

「よし。……飛べ！」

それを聞き、両者同時に飛翔。

先んじたのは、セシリア。目標高度に達した時点で、一夏から一メートルほどの距離を開けていた。

まだ一夏は、空を飛ぶ、といつ行為に慣れていないのが現状であった。

『織斑、遅いぞ。スペック上では【白式】の方が上なはずだ。…お

前は“特別なもの”を手にしただけ、その程度では済まないはずだ』

「すいません…俺のミスですか…」

一応、急上昇と急降下は先日習い、実行したのだが、いかんせん慣ない部分が多くある。

もつとも、今回のセシリ亞は《スタートライトmk?》を開いていないので、先の戦闘より機動力が向上していると言つ点もあるだろうが。

先日の戦闘で、危なげなくこなして見せた自分が不思議すぎる。

ちなみに、現在のツインコア回調率は63パーセント。先日金寺が細工を加えたため、以前よりはだいぶましになつたようだ。

「自分の前方に角錐を開くイメージ……教本にはそう書いてあります、イメージは所詮イメージ。自分のやりやすい方法を摸索する方が建設的でしてよ?」

先を行つていたセシリ亞が、速度を落として一夏に並ぶ。その心遣いに、一夏は感謝せざるを得なかつた。

「セシリ亞…」

「差し出がましいようですが、……どうやら、あまり慣れていないように見えましたので、

「まあ、否定できないな」

数日前のクラス代表決定戦以降、セシリアの一夏に対する態度は変わっていた。

細かく言えば、接し方が柔らかくなってきたのだ。

正直、当初の態度があれだつただけに、最初はかなり違和感を覚えたのだが。

「その……よろしければ、放課後に指導して差し上げますわよ?」

「指導?」

「その時は、二人きりで……」

『織斑、オル「ツ」。急降下と完全停止をやってみせり』

セシリアの言葉を遮つて、千冬から通信に入る。

表情を引き締めると、セシリアは【ブルー・ティアーズ】のスピードを上げた。

「では、お先に」

そのままの勢いでいくらか進むと、九十度に近しい角度で地面に降下。

ギリギリまで待つてからスピードを落とし、激突を避け、着地する。

(やつぱり上手いな…この前は何とか互角に戦えたけど、彼女のいろんなところを見習つていかないと)

改めてセシリアに尊敬の念を抱きつつ、一夏もセシリアの後を追おうとして。

(またかよー)

またしても、頭蓋内に現れる何かのビジョン。

今度は、人の顔が見えた。

その顔は、なぜか見覚えがあつたが、すぐビジョンが終わつたため考える余裕がなかつた。

とりあえず速度を落としてゆつたりと着地。千冬に「急降下と完全停止をしろと言つただろ」と出席簿アタックと軽い一喝を食らつたが、その時の一夏はさつき脳裏に浮かんだビジョンのことを考えていたためよく聞いていなかつた。

おかげでやうにもう一回追加で出席簿アタックを食らつたが。

「まあいい。織斑、武装を展開しろ。それぐらいはもう出来るだろ
う」
「は、はあ」
「返事は「はい」だ」
「は、はい」

考え方をしていて間抜けな返事になつてしまつたのはさておき、一夏は右手を突き出して《雪片式型》を展開しようとする。

刃が純白に煌めく刀を連想し、右掌に意識を注ぐ。

淡い白銀の光がはじけ、灰色の近接特化ブレード《雪片式型》が展開された。

「初心者にしては、まあまあだな。もつと早く展開できるようになれ。実際の戦場では、0・5秒が命取りになるぞ」

ツインコア搭載の【白式】の補助もあり、初心者にしては早いスピードで展開ができた。

これも、金寺が施した細工の一つである。

「次にオルコット、主武装を展開してみる」「はい」

指示を受けセシリアが返答すると同時に、ほんの一瞬青白い粒子が煌めく。

刹那、彼女の両手には六七口径高エネルギー・ザーライフル《スター・ライト Mk.2》が展開されていた。

…銃口を真横に向けて。

「速さは合格点だ。だが、一体どこに向けて銃口を構えている?」「で、ですがこれはわたくしのイメージを固めるのに重要なことでして…」

「それで、味方を撃つつもりか? 第一それでは早撃ちできないぞ」

「…………直します

筋が通った千冬の言葉に何も言い返せず、セシリアは受け入れるしかなかった。

確かに、これでは速攻ができない。

「よし、次は近接武装の展開だ」「えつ……あつ、は、はい」

続いて近接武装の展開を指示されたが、セシリアは何やら焦つていた。

『スタートライトmk?』を収納し、【ブルー・ティアーズ】の基本装備である近接ショートブレード『インター・セプター』を展開しようとしているが、セシリアの右手に青白い粒子自体は現れるものの、形にならない。

この武装の量子変換は、必然的に操縦者のイメージといふものが重要になつてくる。それゆえ、近接武装を展開するのに慣れないらしいセシリアはいかんせん戸惑つてしているようだった。

「…どうした?」「

「す、すぐです……ああもうっ! 『インターフィア』! 『

半ばやけくそ氣味にセシリアが声を張り上げると、やつと刃渡りの短いショートブレード『インターフィア』が展開された。

武器の名を言いながら展開するのは基本中の基本でることから、セシリアが『インターフィア』を使い慣れていないのは一目瞭然

だった

そもそもこの武装はあくまで非常時のためにあるもので、セシリア本人もろくに展開したことがない。

「これらなんでも遅すぎだ。もつと早く展開できるようあるんだな」

「じ、実戦では接近されないので問題ありませんわー…」

「ほう。先日の戦闘のダイジエストを今こじで語つたとしてもか?」

「…そ、それは…」

先の戦闘、 対【白式】戦 敵機の急上昇と急降下によつてセシリアはものの見事に懐を取られてしまつている。

無論、何も言い返せない。

そしてセシリアの苛立ちおよび怒りの矛先は、その戦闘の相手に回り、

『貴方のせいですわ!』

『それはねえだろ!』

IS同士の通信でハツ当たりが来たが、予測していたので即座の突つ込みも問題なくこなせた。

1・関係（後書き）

指摘・感想あればお願ひします。

2・田舎（福島村）

いの辻つかひ、 金井・一眞ノハドが爲へなつてゐる。

2・白式

その日の放課後、一夏は金寺立ち会いの下で、【白式】の試験運転をしていた。

本来この時間は補講を行うはずだったが、だいぶ一夏が授業についていけるようになってしまったため、折角なのでこの時間を【白式】のために使おう、ということになったのだ。

現在、第三アリーナを貸し切った状態で、【白式】を駆る一夏はアリーナ内壁に沿って航空している。

金寺の目的は、高速機動時でのツインコア同調率のデータ採取だ。一夏はすでに彼から「とりあえず飛ぶことだけに意識を注ぐように」と言っているため、言われた通り内壁にぶつからないよう、注意して航空している。

航空開始から数分後、金寺からの通信が入った。

『そろそろOKだ。降りてきてもいいぞ』
「了解しました」

その言葉を聞き、慎重に機体制御をおこないつつアリーナの地面に着地。すると、空間投影モニターに航空時のツインコア同調率が示される。

『だいぶマシになってきたな。本来の力には程遠いだろ？が、少な
くとも前みたいにオーバーロードを起こす心配はない』

金寺の報告に一夏は一安心した。

また戦闘中にあのようなことがあつてはたまつたものではない。

『でも、いろいろと不可解な点もあるみてえだな』

「不可解な点？」

そのワードに疑問を感じ一夏が聞き返すと、空間投影モニターに【白式】の基本データが表示された。

一夏にしてみれば理解に苦労するような文字と数字の羅列だが、金寺はこの中からこゝか不可解な点を見つけたらしい。

「えつと…何をどう見ていいやら……」

『まずここだ。ここは形態移行に関するデータその他が羅列してある』

彼の言葉と同時、データの羅列の一部が拡大表示される。そこにはとあるパーセンテージがいくつか表示されている。

『そいつらは一次移行後の稼動データなんだが…どうも本来の稼動値に到達していない。それどころか…よくよく見てみると一次移行したかも分からん状態なんだ』

「…はい？一次移行したのに一次移行してない的な？」

『そう理解してもいい。最もな表現をするなら「まだ完全に一次移行を終えていない」って感じだ』

「完全に終えてない…」

『まあ形態移行は時間がものを重つからな。こればかりは気長に待つしかねえ』

通信を通して、溜息が混じつた金寺のぼやきが聞こえてくる。

そういえば、この人には【白式】のロールアウト前からいろいろ助けてもらつたな、と一夏は思つ。

正直、自分関係の事に関してこんなに苦労してもらつてよいのか、と申し訳なく思う一夏の心境を知つてか知らずか、引き続き金寺はこれまで調べた【白式】に関する事の報告を続けた。

『あと、【白式】の拡張領域バスクロットだが、单一使用能力ワンオフ・アジャリティの《零落白夜》に完全に使い果たされている』

「じゃあ、他の装備ができるって事ですか？」

『その通り。これからは刀一本で戦い抜くんだな』

悲しい現実を思い知らされた上ばつさりと斬り捨てられ、一夏は思わず肩を落とした。

『とはいへ、この《零落白夜》もたいした曲者だ。発動中の《雪片式型》は、『アによるエネルギー性質のもの全てを無効化する。通称『バリア無効化攻撃』。』

流石の一夏も、この金寺の言いたい事は分かつた。

簡潔明瞭に言い表せば、「一撃必殺」。

一太刀でもまともに命中すれば、恐ろしい威力を發揮するだろう。何せ、ISの防御の肝であるシールドバリアを削り取つてしまふのだから。

そんな事を考へていた一夏は、アリーナの入り口に灰色のIS訓練機の【打鉄】^{うちがね}を装備している人物を【白式】のハイパー サーで補促した。

「… 篠? どうして…」

『俺が呼んだ』

【打鉄】をまとつている黒髪ボニー テールの彼女は、紛れも無く篠ノ之 篠その人だった。

どうやら、金寺がじきじきに呼び出したらしく。

「篠、訓練機の使用許可下りたのか? あれつて結構大変で待ちも多
いはずじゃ…」

『いや、金寺先生が特別に許可をくれた』

ISの開放回線で聞くと、意外な返事が返つてきた。

『さて、これから一人で模擬戦を行つてもうう。どっちかのシール
ドエネルギーが尽くるまでな。いいか?』

『わ、分かりました。篠は…』

『問題ない。そのためにここへ来たようなものだ』

そう言つ篠の右腕には、【打鉄】の基本装備である日本刀型の近接ブレードが展開されていた。

向こうはやる気満々だ。ならば」いつもそれ相応に相手しなければ。

「やつが、宜しく頼むぜ」

『ああ、じつじつ』

軽く言葉を交わしつつ一夏と篝はアリーナ中央部に移動。ある程度距離をとり、互いの武器を構える。

『忘れてた一夏。単一使用能力の《零落白夜》は俺が良いと言つまで発動禁止な』

「…分かりました」

金寺のよく分からぬ指示に軽く返事をしつつ、対戦相手を見据える。

一人がIS同士で戦うのは、今回が初めてだ。剣道では篝が常に優勢だったが、IS同士となればどう転ぶか分からない。

よつて二人とも、とてもワクワクしていた。

一瞬の静寂のあと、

『そんじゃ…模擬戦はじめ!』

金寺の声を皮切りに、近接ブレード片手に同士に激突。

一回目の激突は、鍔迫り合いによる甲高い金属音を生み出しだけだった。

『くつ……。』

つながつたままの開放回線から、苦しそうな簫の呻き声が聞こえてくる。

生身の戦闘とエラでの戦闘といつ事で、幾分とその違いを実感してこるのであらう。

操縦者としては僅かながら一日の長がある一夏と、操縦するのも戦闘をするのもほぼ初めての簫。その差は、歴然と現れてくる。

だが、刀を扱うものとしては、長年剣道をたしなんできた簫に軍配が上がる。

その剣術もエラの操縦に自然と反映されるため、若干押されながらも簫はほぼ対等に戦っていた。

『こわさかなれないが……なかなか楽しいものだな！』
「そりやよかつたぜ！」

一命、二命、三命、四命。

刃同士のぶつかる音が立て続けに響き、両者のシールドエネルギーも徐々に低下していく。

『よし一夏、《零落白夜》の使用を許可する』

「分かつた。惜しみなく行くぜ……。』

『零落白夜？』

金寺のどいか無機質な声。一夏の気合十分といった感じの声。簫の不思議そうな声。

それらを引き金とし、【白式】の空間投影モニターに一つのウインドウが浮かび上がる。

ワントップ・アピコトイ
单一使用能力《零落白夜》発動可能。

迷い無く一夏は発動した。

その瞬間、灰色の実体剣だった《雪片式型》の刃が、眩い純白の煌めきを放つた。

敵のシールドエネルギーを削り取る、絶対無敵の刃。

それを手にした一夏は、不思議と猛烈な自信がわいてきた。

もう何も怖くない。恐れる必要は無い。

そう耳元で囁かれているような感じだ。

「うおおおおつーー！」

力強く雄たけびを上げながら、一夏は簫に向かつて猛突。簫も一夏の気迫を感じ取ったのか、近接ブレードを構えると口元を引き締めて迎え撃つ。

鎧同士がぶつかり合ひ、その間に篝に生じた一瞬の隙を、一夏は見逃さない。

狙い済ましたように、そこへ向かつて《雪片式型》を振り下ろす。

篝は避けきれないと判断したのか、腕の装甲を掲げてダメージを最小限にしようとしたが、

『 なあつ！？』

篝の両目が驚愕に見開かれる。

エネルギー性質のもの 無論シールドバリアも例外ではないを全て無効化する最強の剣をとともに喰らっているのだ。

恐らく、今【打鉄】のシールドエネルギーがすさまじい勢いで削られているのだろう。

勝利を確信し、そのまま押し切りとして一夏は、

『 模擬戦終了。篝の勝ち』

『…………え？』

水をさすよひに屈いた金寺の一聲によつて、簾と共に思わず間抜けな声を出していた。

「のとせ、【白式】のシールドエネルギーはゼロを表示していた。

「俺…どうして負けたんですか？」

すっかり口が沈んだ第三アリーナ。
あれから簾との操縦訓練などを終え、アリーナのカタパルト内で
一夏は金寺に質問をした。

その金寺は、現在備え付けのモニターで先ほどの戦闘データに目を通している。

「それだが、《零落白夜》が原因だ」
「どうして…？」

一夏が戸惑いつぶつな声をあげると、金寺は一息ついて一夏に向き

直る。

「確かに、《零落白夜》もとい《雪片武型》は、現存する工房の武装の中でも最強クラスの武器だ。しかし、それには決定的なデメリットが存在する」

「デメリット?」

「《零落白夜》は、自分自身のシールドエネルギーを糧にして発動する。つまり、発動中は【白式】のシールドエネルギーが《零落白夜》に比例して大幅に削られるんだ」

「それじゃあ、諸刃の剣つて事に……」

なんという事だらうか、機体だけでなく、武器も欠陥があった。先ほど自分が抱いた絶対的な自信が、霧のように消えていきそうになる。

「…正確な表現だな。よつは使いどころに気をつけろ、って事だ。後先考えないで発動すると、自分の身を滅ぼしかねないぞ」

「は、はあ…」

どうやら自分は、ある種どんでもない機体を授かってしまったらしい。

一夏も金寺同様に、悩みの種はぬきないらしい。

と、とある悩みが、一夏の脳裏によぎった。

「あの…先生」

「ん、何だ？」

実は、と書こ始めよひとしへ、一夏は躊躇してしまつた。

浮かぶ。

そんなこと、話したところで信じてもらえるだろうか。

「どうした? IIS 関連だったら、多分答えてやれると思つたけどよ」

よつて、嘗つだか嘗つてみる事にある。

「実は……最初に【白式】に触れて以降、時々、脳裏に何かのビジョンが浮かぶんです。なんか戦闘だつたり宙に浮いていたり……」

一笑に介されないと思つてはいたが、腕を組みながら眞面目に金寺は考えていた。

「それってさ、具体的にどんなのだつたりする訳?」

「えっと… やつを言つたとおり戦闘の様子だつたり、あとは宙に浮いていてなんか変な物体を打ち落としていたり… でもそれ、傍から見てるんぢやなくて、まるで自分がやつていいようなもので… でも、どれも一秒も見えないんです」

少なくとも、あれは第三者の田線ではなく、それを実行している者の田線だったと思つ。

やつでなければ、あの不気味なリアルとは表現しようが無い。

暫し考え込んでいた金寺は、一つの可能性に思い当たつ、ふと顔を上げる。

「多分、お前が見たそのビジョンヒヤウナ、【白式】のシャンコアが関係しているな…」

「やつぱつ、理由は【白式】?」

「それ以外に可能性がねえ。一応、お前に話伝えておくが…」

そこで金寺は言葉を区切り、ふうと一息吸ってから、一夏の田を見据える。

一夏も金寺が重要な事を言おうとしていることを理解し、真剣な面持ちで聞くこととした。

「【白式】に搭載されたこの「アーティア」、【白騎士】と【暮桜】のものだ」

「…え？」

一瞬、金寺が何を言っているのかわからなかつた。

【白騎士】と【暮桜】。

ISを動かせるようになるまでそいつた事柄に疎かつた一夏ですから、その機体名は知つてゐる。

【白騎士】。

八年前、世界中のミサイルがハッキングされその中の一部が日本に向かつていつたが、その全てを撃ち落とした一機の純白のIS。ちなみに、この一件は「白騎士事件」として語り継がれ、北欧に現れて戦争を数十分で鎮圧した黒いISと共に、ISの性能を全世界に知らしめた存在になつてゐる。

【暮桜】。

第一回、IS世界選手権「モンド・グロッソ」にて姉 織斑千冬が駆り、見事格闘部門及び総合部門で優勝を果たした機体であ

る。

それらのコアが、今現在一夏の機体である【白式】に搭載されて
いるというのだ。

驚くほか無い。

「でも、どうして…」

「俺が知るか。篠ノ之束がここを改造したから、あいつに聞き出すしかない」

「先生、束さんのこと知ってるんですか？」

少々気になつて一夏が聞いてみると、「一応な」とだけ短い返事が返ってきた。

どうやら、あまり話したくなかったらしい。

「話を戻すぞ。恐らくお前が見たそのビジョンは、【白騎士】と【暮桜】が実際に経験した事なんじゃねえか？お前の頭ん中に流れ込んできたのは良く分からんが、コアがそれらを覚えてたのかも知れん」

金寺の話を黙つて聞く一夏は、いまだに彼の言つたことが信じられないようだつた。

何より、実感がわかない。

【白騎士】と【暮桜】といつ、HSの歴史上においての英雄とも呼べる存在のコアが搭載されている機体を自分が駆るというのがまことに実感に欠けた。

そんな一夏の心境を理解したようで、金寺はそっけなく言つ。

「まあ、これが事実だ。… 束が何考へんのかは知らねえが、お前はそいつらを託された、といつ事になるかもな」

ツインコア。

【白騎士】と【暮桜】の系譜。

HISを超越するであらわすHIS。

未知なる、力。
俺は、託された。

その現実が、一夏の身に重々しくのしかかつてくる。

果たして、その力をしつかり使いこなせるのだろうか。

そんな不安が、心の内を瞬く間に占めていく。

「まあ、今は大げさに氣負う必要は無いや。…………… 安心しろ。
もしお前が力の使い道を間違えるような事があれば、強引に直して
やるからよ」

やけに重みがある金寺の一言に、一夏はその不安が少しあき消されたような気がした。

この人なら、絶対に力の使い方を履き違えない。

何故か、そう確信がもてたからだ。

会ったときから、金寺が内に秘めているであろう強さを一夏は感じ取っていた。

それは、姉の千冬とは違いながらも、それと同等な“何か”を持っていた。

自分の中で最強の存在である姉の千冬が、彼を認めるような発言をしていたのを思い出す。

今までは、千冬以外に尊敬できる人物が見当たらなかつたが、どうやら見つかりそうだった。

ふと、金寺が携帯端末に目を通す。
それにつられて一夏がカタパルト内の時計を見てみると、「6：39」と表示されていた。

もう夕食の時間らしい。

「…どうする、飯食いに行くか？」
「じゃあ、お供させていただきます」

そんな会話をしつつ、一人はカタパルトを後にし、カタパルト内の照明がおちる。

二人の間には、確実に信頼関係が結ばれつつあった。

2・白式（後書き）

さて、【白式】のシンコアですが…

分かっているとは思いますが、「機動戦士ガンダム00」の【ダブルオーガンダム】の「シンドライヴシステム」が元ネタです。

どうしてこのようなものを取り入れたかといつと、度々エネルギー切れを起します【白式】を見て、

コア一つ搭載すりやいくね？

そう思つたからです。

極めて単純な思考かもしませんが、そのような事から本作品オリジナルの【白式】は生まれました。

ちなみに、今の所外見は原作とほとんど変わっていません。 そして言えば、両翼にコアが内蔵されていて、そこにGNコンテンサーのようなものがくっついているような感じです。

ちなみに、今日東京MXでガンダム00の再放送がありました。 セカンドシーズン24話、ダブルオーライザーのトランザムバースト発動回です。

改めて、人の作り出したものに感動しました。

3・全力（前書き）

一夏 vs セシリア、決着。

3・全力

二日後、第一アリーナで、ついに一年一組クラス代表決定戦の再戦が行われる事になった。

両者とも万全であり、現在アリーナ上空にて自身のエースを身にまとい向かい合っている状況である。

「どうやらそつちも準備万端みたいだな」

『そちらも同様みたいですね…あえてもう一度聞きますが、手加減は無しでいいのですか？』

「何度も聞かれようと答えは同じだぜ」

『そうでしょうね。わたくしもその答えを期待していましたわ』

ふふつと、大人びているいつもと比べて幼さがある笑みを浮べたセシリ亞。

対して一夏は、既に右拳に意識を注ぎ、試合開始後のビジョンを思い浮かべている。

そして、

『それでは両者、試合を始めてください』

アナウンスと同時に、セシリ亞、一夏ともに自分の主武装

『スター・ライトⅢK?』と『雪丘戦記』を開幕。

「先制攻撃を」

『いひらが仕掛けますわ！』

刀の刃を純白に煌めかせ、真正面から飛び込もうとした一夏を、セシリアの『スター・ライトⅢK?』による早撃ちが妨げた。

「くそつ！」

『わたくしもずいぶんと舐められたものですわね…』

軽く舌打ちした一夏は、立て続けに飛来する青白い光条から直撃を避けるため、回避行動に専念する事にした。

やはり、無理だったか。

そんな考へが脳裏によぎる。

一夏は試合開始後、速攻でセシリアの懷に飛び込んで先制攻撃を食らわそうとしたのだが、敵の早撃ちの方がすばやかつたため失敗に終わった。

やはり、代表候補生の実力は伊達ではなかつたといふ事だらうか。

即座に気持ちを切り替え、一夏はセシリアとあまり距離をとらなによつに迫り来る射線を避けつつ、攻撃の機会を見つけようとした。

一夏が先制攻撃を仕掛けよひとした事は、セシリアにとって想定内だった。

【白式】が近接特化ブレード『雪片式型』を主武装にする以上、それを投擲でもしない限り近づかなければダメージを与える事はできない。

よつて、隙あらば一夏が白らの懷へ飛び込んでくる事は容易に想定できたのである。

そしてそのために、セシリアは先の戦闘からの空白間のほとんどを、対一夏戦へ向けた特訓を単独で行っていた。

第一に、『スターライトmk?』の展開である。

先日の授業で千冬にも指摘されたとおり、どうも自分はイメージ付けのために『スターライトmk?』を横に構えつつ展開する事が多かった。

しかしそれでは、速攻で懷に飛び込まれた際に対処する事ができない。

よつて、まずセシリアは『スターライトmk?』の展開を、以前より早くかつ前方にできるようにしようと特訓を重ねてきた。

これに関しては、特訓の成果がしっかりと現れたようである。
しかし【白式】の先制攻撃を防いだセシリアは、現在一定の距離を置きつつ回避に専念している　　様に見える一夏へ向けて『スタートライトマーク?』による狙撃を行っていた。

実際のところ、セシリアは一夏が回避に専念しているとは思えなかつた。

その証拠に、セシリアが距離を取るつと動くと、それにあわせて【白式】も動き、距離を離されないようにしてくる。
これは、一夏が回避しつつ隙を突いて攻撃しようと思つてゐる
そうセシリアは分析していた。

以前のように、自身の奏でる田舞曲で踊らせようとしたが、どうやら彼はそれを拒否しているらしい。

ならば、強引にでも躍らせるべきだ。

「

行きなさい、ティアーズ！

その掛け声とともに、腰背部のバインディングが四つに分離。遠隔操作可能な無線式自立機動ビット 『ブルー・ティアーズ』をいっせいに展開する。

囲むようにビットを配置し射撃を行つたが、一夏は即座に反応して、見事に直撃を回避した。

内心セシリ亞は舌打ちをする。
どうもこのビットの思考制御は、難しくてなかなかものにできない。

この『ブルー・ティアーズ』は、操縦者の意思による操作装置
通称、イメージ・インターフェースによつて制御される。
それゆえ、かなりの集中力が必要となるので、先の戦闘で一夏に動きを読まれたようにどうも操作が単調なものになつてしまつ。
ビットの制御に全神経を注げばそのような事もなくなるだろうが、
ビットの操作に集中しすぎれば、かえつて敵の格好の的になつてしまつ。

だが、

(もうそつそつしかあつませんわ……)

意を決したセシリ亞は、狙撃の機会を狙う事をやめ、ビットの操作だけに全神経を注ぐことにした。

体からやや力を抜き、目をつぶって意識をビットに注ぐ。それにあわせて、ビットの動きも先ほどと比べて複雑になつてきた。

死角だけを狙うのではなく、あえて真正面から撃つたり、または撃たずに移動したり。

動きを不規則かつ複雑にして、一夏をかく乱していく。
何故か頭の中に、必死になつて『ブルー・ティアーズ』の射線を

かいくぐる一夏が浮かぶ。

それが今現在の状況で、【ブルー・ティアーズ】がそれを伝えてくれていると、何故かセシリ亞はそう断言できた。

そしてセシリ亞は、一夏を「狙う」のではなく、一夏を「誘い出す」方に転換する。

あえて彼の進路に光条を放ち、一夏の動きを制限していく。

その間のセシリ亞の集中力は、すさまじいものである。
まるで静寂を保つ水面のように、透き通っていた。

狙うのは、彼が自らの距離に入つた一瞬。

意識を集中という名の思考のつねりに静めて、永遠とも、一瞬ともとれる時間がすぎる。

そして。

“それ”は、水面に一滴の雫が落ちたよつこ、突然訪れた。

「…………」

即座に、射撃体勢に移行。
半瞬にも満たない速さで、《スタートライトマーク?》を構え、トリガーを引く。

その銃口から放たれた青白い一条のビームは、寸分狂わず【白式】の右脚に命中した。

『ぐああああっ！』

シールドバリアのおかげで【白式】の装甲が爆発するような事は無かつたが、直撃したせいか確実に衝撃を『えた』ようで、一夏は叫び声をあげながらやや後ろに吹き飛ばされた。

その隙を見逃さない。

立て続けに《スタートライトマーク?》のトリガーを引き、一夏めがけてビームを放っていく。

一夏も何とか体制を立て直したようで、いくつかの光条は直撃を避けたものの、完全によけきれる事はできなかつたようだつた。

そのまま押し切るべく、セシリ亞は連續でトリガーを引いていく。すると、一夏は何か意を決したようにこちらへ表情を向けると、

【白式】の出せるであろう最大スピードで突撃してきた。

彼が何を考えているのか見当もつかなかつたが、明らかにその動きは直線的だ。

これなら確実に自分の狙撃が命中する。

そう結論付けてセシリ亞は狙撃を続行する事にした。

銃口から迸る青白い光条は、一夏に狙いを定めてまっすぐ向かつていく。

一夏は避けようとしていない。

完全に直撃コースだ。

しかし次の瞬間、セシリ亞は信じられないものを見たかのように目を見開いた。

一夏は、ビームを斬つていた。

ありえない光景だつたが、確かに一夏はその右手に持つ“刃が純白に煌めいた刀”で、ビームの射線を正面から斬り裂いていた。

明らかに常識から逸脱している事態に、驚きを禁じえない。
そのせいで、完全に空白が生まれてしまった。

『気づけば、一夏は今にも自分の目前へ迫りつとしている。
ビックで迎撃しようとしたが、それでは遅い。

「ぐう…『インターフォンター』…！」

とにかく近接ショートブレード『インターフォンター』を展開しよ
うとしたが、既に一夏はセシリ亞の懷に飛び込んでいた。

残念ながら、『インターフォンター』の展開速度だけはビックにも速
くならなかつた。

「うは俺の距離だつ…！」

そう叫びつつ、一夏は【ブルー・ティアーズ】の胴へ純白の刃を
密着させる。そのまま、セシリ亞の背後へ斬り抜けた。

シールドエネルギーを無効化してしまつ刃の斬撃をまともに受け、
思わず苦痛の声をあげてしまう。

それと同時に、ほぼ満タンに近かつたシールドエネルギーが半分
以下になつてしまつた。

驚愕に目を見開きつつも、一夏が背後から一撃目を加えようとし
てこるのを確認したセシリ亞は、何とか『インターフォンター』を展

開し、その刃を辛うじて受け止める。

同時にピットを操作し、一夏へ向けてその射線を定める。

それに集中したせいで、刀で弾かれてしまったものの、《ブルー・ティアーズ》の光条の一つが一夏に命中した事もあり、三撃目を喰らう事は無かつた。

とりあえず距離をおき、敵と向かい合ひ。

「ピームの射線を、斬る、だなんて……無茶苦茶、します、わねつ……」

息絶え絶えになりつつも、自然とそんな言葉が出てきた。
それが呆れていいるからなのか、あるいは彼に対する賞賛なのか。

今のセシリ亞は、そこまで判断できなかつた。

『ピームの射線を、斬る、だなんて……無茶苦茶、します、わねつ……』

息絶え絶えのセシリ亞にそう言われ、当の一夏は苦笑を浮べた。

そりやそうだろうな、と本人も思つ。あの発想は、ゲームの射線をよけつつどう反撃に転ずるかを考えたときに、思いついたものだ。

【白式】の単一使用能力《零落白夜》は、エネルギー性質のものを全て無効化する。

ともすればその対象はシールドバーに行きかちたが、無論ヒームもエネルギー性質のものなので、打ち消す事が可能である。

それに一夏は着眼し、『雪片式型』でビームの射線を斬り裂きつづ接近し、自分の距離へ持ち込もうとした。

結果、まだ敵は健在で、シールドエネルギーを全て削り取ること
はできなかつたようだが、それでもかなりのダメージは与えられた
はずだ。

しかし、一回実行した以上、セシリ亞はそれを警戒してくるだろう。

【零落】
おまけに、【白式】もシールドエネルギーが残り少なく、
『白夜』は後一回ぐらいしか発動できない。

恐らくは、次が最後のチャンス。

このとき、一夏の手元に残っているカード
手段は、かなり
限られていた。

そのまま飛び込むか、スピードを生かしつつかく乱してから飛び込むか、敵の動きにあわせつつ機会をつかがうか。

一夏が選んだのは、最後。

セシリ亞の動きを伺いつつ、隙あらばその懐へ飛び込む。そのために、次のセシリ亞の動きを待つた。

当然、いまだ健在である四基の《ブルー・ティアーズ》にも、その警戒の目は行き届いていた。

そして、セシリ亞 ではなく、《ブルー・ティアーズ》
が動いた。
先ほどまでは一人を囲むように空中で停滞していたが、それらが一夏を狙つて青白い光条を迸らせる。

直撃を避けながら慎重に回避し、徐々にセシリ亞に向けて距離を近づけていく。
どうやら彼女も一夏の意図に気づいたらしく、スラスターを噴かして後退しようとした。

そこへ、一夏は飛び込む。
まさかこの状況で懷に飛び込んでこようとは思っていないかつたらしく、セシリ亞は驚愕を露にしていた。

これが、もう一つ一夏が引いたカード「意外性」。

何を言おうと彼女と自分の力の差は歴然だ。最早、形などこだわ
つていられない。

それに

「これがっ…俺の全力だあつ！！」

『零落白夜』を発動し、迫り来る光条を斬り裂き、セシリ亞に肉
薄。

純白に煌めいた刃を、再び押し込もうとして、

「…………ませんわ！－！」

腰部アーマーから放たれた二基の弾道ミサイルが目に入る。
しかし、それをかわすつもりは毛頭無かった。

かわす事ができないわけではなかつたが、そうすれば確実に、彼
女のもとへたどり着く前に『零落白夜』のデメリットによつてシ
ルドエネルギーが底をつく。

言つてしまえば、どの道負ける可能性が高い。

ならば、たとえ愚直にでも立ち向かって、己の全力を出し切るべきだ。

乱暴に《雪片式型》を振るい、ミサイルを打ち落とし。そして、一気に距離がつまり、ついに《雪片式型》の切っ先が、【ブルー・ティアーズ】をとらえる。

同時、互いの懷で爆発が起きた。

原因は、セシリ亞が最後の最後に放った一基の弾道ミサイルだった。

自分に及ぶ危険を踏まえていても、最後に放った一撃。これが、セシリ亞の全力だったのだ。

その一撃が両者に与えたダメージは大きく、セシリ亞の【ブルー・ティアーズ】は、僅かながら《雪片式型》の切っ先が触れた事も重

なつて、エネルギー残量が風前の灯火となる。

そして一夏はといづと。

「ぐう……そ……やつぱ……無理だつた……か……」

『零落白夜』によつてシールドエネルギーが底を尽きたのと同時に、弾道ミサイルの一撃を喰らつたため絶対防御が発動せず、そのダメージが生身にも及んでいた。

ダメージに耐えられなかつた【白式】が光子となつて消滅し、自分の体が重力にしたがつて落下していくのが分かる。

遠ざかる意識の中で、一夏はある事を考えていた。

（まだまだだなあ、俺……でも、これから訓練していけば、きっと強くなれる。千冬姉も、金寺先生もいるし……）

気づけば、自分は先の未来のことばかり考えていた。
それは、自身の未来に希望を持っているからに他ならない。

千冬、篠、セシリ亞、そして

金寺。

幸いにも、一夏の周りには自身の手本になりそうな人物が結構いる。

ならば、彼ら彼女らに負けないようになつて。

(絶対……超えてやる……)

心の中でそう呟いたとき、一夏の意識は闇に消えた。

3・全力（後書き）

この【白式】ですが、どちらかといふと燃費は悪いほうです。

ツインコアでも、零落白天の使用はエネルギーを著しく消費してしまつので。

それに、完全に（以下自重）

4・理想と願い

目が覚めた一夏の目の前にあつたのは、白い天井だつた。
なんとか感覚を取り戻し、体を起こしてみると、そこは保健室だ
つた。

どうやらあの後、自分は保健室に運ばれたらしい。
ベッドから体を起こした時に痛みなどがなかつたことから、もつ
と自分はミサイルが爆破した衝撃で気を失つていただけなのだと、
一夏は推測してみる。

次の瞬間。

「一夏……無事か！？」

すさまじい勢いでドアを開けた簞が、一夏のもとへ駆け寄つてき
た。

吃驚してベッドから飛び上がりそうになつてしまつたが、それが
自分を心配していたからこそだと思つと、少し嬉しくなるし、申し
訳なさも思つ。

「簞……悪いな、心配掛けちまつて」

思わず苦笑を浮かべると、簞は少々ムツとした表情になつた。

「心配など…まつたくお前はあのよくな状況で…」

「ははは…で、あの後俺とセシリア、どうなったんだ？」

とりあえずあの後の出来事を聞いてみた一夏だが、その内容は驚嘆に値するものだった。

なんでも、突如としてどこからか現れた金寺が、先に落下してき一夏を受け止めて地面に下ろした後、同じようにEISが解かれ落ちしてきたセシリアを、しつかり受け止めたというのだ。

そしてその間にかかった時間は、五秒にも満たなかつたらしい。

その場にいた者全員が驚きを隠せず睡然としたと、篠は説明した。

「あの人って…もしかして人外だつたり？」

「私も一瞬そう思つた…何食わぬ顔で実行していたからな

二人そろつて苦笑。

もしかしたら自分たちは、ある種とんでもない人物に会つたのではないかと思う。

するとドアが開き、別の訪問者を招きいれた。

入ってきたのは千冬と、彼女に同伴しているセシリアだった。

「田が覚めたか…まつたく、冷や冷やさせおつて」

「一時どうなるかと思いましたわ…」

一人とも、一夏のあの特攻に呆れていたようだつた。

実際あれしか効果的な攻撃手段は無かつたのだが、特に言い訳等をする気にはならなかつたので、ばつが悪そうな笑みを浮べるだけにとどめた。

「でも…貴方の今の全力、しつかりと受け止めましたわ」

「そうか…サンキューな。セシリアの全力も、しつかり受け取つたぜ」

あれが、紛れも無い今の一夏の全力だつた。

だがそれも、“今”的話。

いつか今の自分の全力も、彼女等の全力も、全て超えてみせる。

一夏には、その決心がついていた。

「一応、今日一日安静にしておけ。試合の結果などについては後日、な

それだけ言うと、千冬は背を向けて保健室を後にする。
セシリアも、一夏と幕に深くお辞儀をして、同じように保健室を後にしていった。

ドアが閉まつたのを確認した一夏は再びベッドに横になり、幕はベッドの近くにある椅子に座つた。

二人きりの保健室に、静寂が訪れる。

「…一夏」

「ん？」

「その…二人きり、だな」

「…ああ、そうだな」

一夏にやや赤くなつた頬がばれないように、若干顔をそむける簫。

これは、最近になつて一夏を一人の異性として意識し始めたからこそなのだが、当の本人は考え方をしているようで、たいして気にも止めなかつた。

静寂のあと、暫くしてから一夏はおもむろに口を開く。

「…簫」

「んつ…なんだ？」

「俺…超えてみせる」

無意識にそう出た一夏の一言に、簫は思わず首を傾げた。それに構わず、一夏は言葉を紡ぐ。

「今の俺も、今の簫も、今のセシリ亞も、今の千冬姉も…絶対に越えて、もつともつと強くなつてみせる」「…で、その理由は？」

一夏の言葉に続くように、保健室に新しい来訪者が現れた。

金寺龍輔である。

「金寺先生…」

「細かい話は後。で、何で強くなりたいんだ？」

先ほどの言葉を聞いたものなら至極真っ当な質問をしつつ、金寺は一夏のベッドに近づく。

一夏はまづむき、少し考え、自然との理由を口にした。

「今ままじや、俺自身が満足できなしし……それに、もしも俺らの身の回りに何か一大事があつたとき、それからみんなを守れるようになりたいんだ。…昔千冬姉が、俺を守ってくれたように」

実際のところ、一夏はそこまで深く考えていなかつた。

それでも、自然とそのような事が口から出でたという事は、本当にそう思つてこるからなのだろう。

強く、誇り高く、何かを守れる存在。
それを、一夏は求めていた。

金寺は暫しつつも通りの無表情だったが、口元を僅かに吊り上げ、ぐるっと回れ右して、ドアの方向へ歩んでいく。

「…そうか、だったらそれでいいんじゃねえの」

いつも無表情な彼が、このときばかりは笑みを浮べたような気がした。

悠然とその場を去つていく金寺を見ていた一夏はドアが閉まるのと同時に、ふと呟く。

「…助けてもらつた御礼するの忘れてた…」

その日、すっかり夕日が沈んでも、一年一組副担任金寺龍輔先生の仕事は、終わつていなかつた。

といつても、その大半が最早彼にとつて趣味と変化しているのが。

最初に済ますのは、自分が行つた授業についての提出レポートのまとめ、宿題の整理、管理など、主に授業に関すること。

これに關しては、特別面白味を見つけることができなかつたため、早めに済ますことにするのだ。

『面倒臭い』ことは早く終わらせるに限る、これが金寺の持論の一つである。

ちなみに、クラスに關することは、ほぼ千冬が一括して担当している。

そうして余計な教務を終わらせた金寺が始めたのは、【白咲】や【ブルー・ティアーズ】の戦闘データ採取。

金寺にとって、これほど奥が深いものはない。
自分が知ったころから、ヒュは発展していく。彼の興味が
尽きることはないのだ。

【白咲】のツインコアの回調率及び両機の稼働率をみていく最中、
先ほど保健室で一夏が口にした言葉が脳裏によぎった。

『今ままじや、俺自身が満足できないし……それに、もしも俺ら
の身の回りに何か一大事があつたとき、それからみんなを守れるよ
うになりたいんだ』

純粹に、羨ましいと思つ。

そう金寺が思つのは、とくに後者だ。
彼にとつて、守るべき存在がいる、というのが自分と大きく違い、
そして羨ましかつた。

何らかに羨望の意を向けるのは自分らしくないとは思つものの、
自分には無いものを持つてゐる彼に対し、そういう感情を持つたこ
とは確かだ。

自分にも、そういう存在がそのうち現れるのだろうか。
現れたとしたら、彼のように決意する事が出来るのだろうか。

柄にも無い事を考えながら、金寺は背もたれに体重を預けた。

4・理想と願い（後書き）

地の文つて難しいです。

1・呻吟録（前書き）

こよこよ中国のあの子が登場？

入学式から約三週間後の、四月下旬。

田が沈みかけ、空が夕日のオレンジ色一色に染まっている頃、金寺は一夏と肩を並べてロビーへ向かう渡り廊下を歩いていた。

「この田は」「田ぶり」「【白式】のデータ採取、ツインコアの安定稼動調査などを終えたところだつた。

ちなみに、この田はセシリアが入ってきたりして結構、ギャラリーに騒がれたりしている。

「でも、どうしてこうなるかなあ……」

「んな事言つたつて仕方ないだろ? こいつなつた以上さ」

「いや、分かつてますけどね? 筋も通つてますけどね? けど……」

朝からずつといのよつな調子で愚痴を吐く一夏に、金寺は苦笑するほか無かった。

この田は、彼にとって今後の学園生活を左右するよつな事が起きた以上、仕方が無いとは思つ。

「それに、なんか夕食が終わつたらパーティやるとか言い出す始末ですよ?」

「それぐらいはいいだろ、一応お前の事祝おうとしているんだし。
ほどほどにしておけよ?」

「ほどほどにする前に俺が持たないと思つんで大丈夫ですよ」

「なんだそりや」

互いに苦笑。

「この二人だが、最近になつてかなり親密な間柄になつてきた。

金寺が一夏のクラスの副担任であり、彼のI.Sの専属整備士であることからも当然といえば当然だが、学園内で数少ないたつた二人の若い男であることも、その理由だらつ。

「この状況に、一部の俗に言つ“腐女子”がよからぬ妄想を脳内で繰り広げたりしていたが、決してそのような関係ではない。

むしろ、気心知れた友人関係のようなものだ。

「そんじや、戦場のほう行つてきます」

「表現が大袈裟すぎだろ…もう一回言ひかゞ、ほどほどにしておけよ」

そういう言葉を交わしつつ、金寺は職員室へ、一夏は食堂へと向かつ。

同時刻、IS学園正面ゲート前。

「IS学園…ふうーん、ここがそうなんだ…」

そこには、ボストンバックを片手に持つた一人の少女がいた。栗色の髪をツインテールにしており、体格は小柄。パツチリした眼も相まって、どこか幼さを感じさせる。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ？」

歩を進めつつ、彼女は上着のポケットに突っ込んでくしゃくしゃになつたメモを取り出す。
そこには校舎の見取り図が書いてあるのだが、いかんせん大雑把すぎて分かりにくかった。

「本校舎一階総合事務受付……って、どこにあんのよ」

思わずメモに向けて愚痴を吐いた転入生であるこの少女だが、そうしたところでのこの状況を開拓できるわけではない。

結局、学園の関係者に会えたら僕偉だと思いつつ、自力で探す事にした。昔から考えるよりも行動を優先する、彼女らしい選択であ

る。

そもそも、彼女が転入生なのは理由があった。

中学二年時まで日本にいた彼女は、両親の事情で祖国　　中国に帰り、その後ＩＳ適正が高い事が判明して軍隊に入り、持ち前のセンスで国家代表候補生にまで上り詰めた。

今年で15歳　　高校一年生になる少女は、今年からＩＳ学園に正式に入学するのだが、諸事情により、それが遅れてしまったのだ。

平たく言えば、軍上層部の不祥事と、一ヶ月前まで国内の一部で起きていた反政府デモが原因である。

とはいってもそこまでこのＩＳ学園に入学を望んでいたわけではなく、とりあえず退屈だった日常から抜け出したかったし、何より数ヶ月前に突如ニュースで流れた『世界初のＩＳを扱える男子』である幼馴染にも会えるだろうから、と、そんな軽い気分だった。

「あー、女だらけの環境に放り込まれてどうしてるだろうなあ。」

「案外、もう女の一人や二人作ってたりして。

そんな、半ばどつでもいいことを考えていると。

「 ん？」

離れたところに、不思議な二つの人影を見つけた。
夕日のせいか、影はやけに大きく見える。

だが、彼女の心何かが引っかかっていた。
その影は、どう見ても女性のものとは思えない。

「誰だらう…この学園の人かな？」

そうならばありがたい。何せ自分はこの学園内で本格的に迷い始
めている。

そう思いつつ、その人影に近づこうとする。

「仕方ないだろ?」ひつた以上

」

!

心臓が、止まつた。

一瞬、本氣でそう思つた。

当たり前だ。

聞こえてきたのは。

低く、重く、それでもどこか人を惹きつけるような声。

一度と聞くことが無いと思っていた声。

また会いたいと、心の底から思つていた青年の声。

その声の主は

「金寺…龍輔…？」

一人の生徒と肩を並べて歩いていた青年
少女
鳳鈴音は、ただ見ていることしか出来なかつた。

金寺龍輔を、

1・再余前（後書き）

金寺はこいつの間にフリグを建築していたみたいですね

2 · それぞれの夜（前書き）

ギャグパートは正直苦手です…

2・それぞれの夜

金寺の姿をその眼で確認してから数分後。

目的地の総合事務受付は、その直後に見つかった。

先ほどの衝撃を忘れられないまま、鈴音は受付を済ます。

「ええと、それじゃ手続きは以上で終わりです。HHS学園によつて
そ。凰鈴音さん」

極普通の商業スマイルを浮べる事務員の言葉も、今の鈴音には聞
かない。

「えつと…ひとついいですか？」
「どうぞ、どのような事柄を？」
「あの…」

その名前を口に出さうとした瞬間、喉元が詰まつやうになる。

恐りしく、ずつと会いたいと思つていた青年に会つて、様々な感情
がじけいや混ぜになつているのだろう。

それを一呑、鈴音は飲み込む。

「…金寺龍輔、つて人…この学園に、います…か？」

その問いに事務員は少なからず驚いたようだつたが、笑みを浮べつつ返答する。

「ええ、いますよ。今年から学園所屬になっています。…もしかして、お知り合いですか？」

「あ…まあ、そんな感じで…」

得体の知れない恥ずかしさを抑え込みながら、何とか鈴音は言葉を搾り出す事が出来た。

こうして、編入手続きを終えた鈴音は、ただ今指定された学生寮の自室に向かっているのだが、昂揚感を抑える事が出来ず、軽い足取りで移動していた。

「会えた…のかな？でも同じ場所にいるんだからきっといつでも会えるよね…！」

感情の奔流が、ものすごい勢いで流れているのが分かる。

本当に、この昂揚感は抑える事が難しそうだ。

一年近く想い続けてきた自分の中の“彼”に対する想いが、一段と大きくなつてきているのを感じる。

凰鈴音、15歳。

人生の中で一度きりの、初恋を自覚した一夜であった。

同じ頃、夕食後の自由時間。

寮のロビーにて、とあるパーティが催されていた。

「織斑君、クラス代表決定おめでとー！」

その名も、「織斑一夏クラス代表就任記念パーティ」。

クラッカーの音が鳴り響き、ぱらぱらと拍手が上がる。

一体何故、先の戦闘でセシリアに敗れた彼がクラス代表になってしまったのか。

その理由は、この日の朝のS.H.Rにある。

「クラス代表の件だが、織斑一夏に決定した」。

突如、教壇に立っている金寺がそんな事を言い放ったのだ。
どうせ代表はセシリ亞に決まつただろうから、自分には関係ない
ことだ、と聞き流そうとしていた一夏は吃驚仰天。

どうして俺なのか、と問い合わせたところ、セシリ亞本人が「わたくしが辞退したからですわ」と言つた。

おまけに、「いいんじやねえの？実戦経験をつむにはぴったりだ
し、悪い事ばかりじやない」と金寺が言い出す始末。

まあ確かに、クラス代表となれば実戦経験も増えるだろうが、金
寺の一言は、明らかに先日保健室で言つた自分の言葉が反映されて
いた。

そんな訳で、今現在一夏は多くの生徒　　全員女子に囲まれて
いる状況の元、テーブルを一つほど独占している小さいパーティ会
場の中心にいた。

本来、そのテーブルの周りのいすに座れる人数は限られているの

だが、あちらこちらから人が集まっているため、端から見れば一夏が女子に囲まれているように見えるのだ。

とはいえ。

(どうしてこうなった…?)

そう思わずにはいられない。

確かに、戦闘中はそういうのも忘れてかなりヒートアップしたりしてしまつたが、まさかそれらがこのようになるとは。

色々理不尽な気もしなくないが、こうしてなつてしまつた以上仕方が無い、と思いつつ、右手に持つてゐる、レモンとビタミンCをテーマとしている某炭酸飲料の入つた紙コップを、口につけて傾けた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

満足そうに言つ一組の女子に対して、何故か他クラスの女子が相槌を打つていた。

「人氣者だな、一夏」

横に座つてゐる筈が、そんな事を言つてくる。

「ん？まあクラス代表なら、そんなもんじゃないのか？」

若干不機嫌そうな彼女に対し、何気なくそう返した一夏だが、この場に副担任の青年がいれば確實に「無自覚すぎだらうが」と言つていいだろう。

そんな一夏たちを、ふと閃いた光が覆い尽くした。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ましたー！」

光の発生源は、そう名乗る生徒の持つ、一眼レフカメラだった。右腕に『新聞部』とかいてある紋章をついている事からも、眼鏡を掛けている一年生の彼女が新聞部員である事は一目でわかる。

その彼女が、一夏に懐から取り出した名刺を渡した。

そこには「丁寧に、『新聞部長 黨薰子』とかいてある。

「ではではば、ぱり織斑君！クラス代表になつた感想を、どうぞーーー！」

眼をキラキラ輝かせ、ウォイスレコーダーを一夏に向けながら、薰子はそう聞いてくる。

正直、いつ言つのは苦手だ。

何か面白味があることでも言つべきなのだろうが、生憎一夏はそういう言つのが得意ないので、

「うーん…まあ、代表として精一杯頑張ります

「よつな、極めてスタンダートな一言」とじまつた。

対して、薰子は若干その答えに不満があつたようで、つまらなそうな顔をしてくる。

「えー、世界で初めての男性ヒュ操縦者なんだから、もつといいコメントちゅうだいよー。世界中の女は俺の雌奴隸にしてやる、とか！」

「すいませんね、そういう肉食キャラじゃないんで」

荒唐無稽な冗談、としか言ひよつが無い薰子の一言に、極めてふつきりぼうに一夏は返した。

なのに、

「一夏さんっ！？まさか、本氣でそのよつな野望を…！？」

「お前はいつの間に…ふつ、ふしみだらだつ…！」

「何故そこのお一方は真に受けているらしさるのでしょうか…？」

セシリ亞と篝は冗談だと思つていらないらしく、若干顔を紅くしつそんな事を言い始めた。

一体どうしたらあれをまともに受けるのか。それ以前に、篝は自分がそういうキャラクターではない事を知つてはいるはずではないのか。

一夏にしてみれば、日頃の授業以上に理解が及ばない。

これは、一人の心境が年頃の少女特有のものへと徐々に動いていくているからこそなのだが、誰一人気づいてはいないようだ。

「まあ、今のは冗談だから面白おかしく捏造しておくれ〜」

「やめてください。俺の社会的立場が危ないんですけど！」

嫌な予感しかしながら、「冗談抜きで止めにかかった。

「世の中のジャーナリズムなんて、そんなものよ。一夏君」

「いやいや例えそうだとしても、それを肯定しちゃダメでしょうー。」

「どこの国には、政府からの圧力を受けて捏造をしつつも人気を

誇る某予言者新聞とか

」

「そういう他作品関連のネタ禁止！」

「とにかく奇麗事なんて、この世には存在しないの！」

「この世の真理にまで踏み込まないでください！せめてジャーナリズムだけに！」

なんというか、割と本気で突っ込みだけは上手くなりそうな気がしてきた。

「じょ、冗談だったのか…でも、本当でも良かつたようだ…」

隣で篠がそんな事を呟いていたもの、聞かなかつた事にした。

続いて、薰子はセシリ亞にもインタビューやする。

「よかつたらイギリスの代表候補生でもあるセシリ亞ちゃんのコメントもちょうだい」

「わたくし、こうじつたコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

やうは言つものの、セシリ亞は満更でもないようで、よく見ればいつも以上に髪型が整っている。

「ホンと軽く咳払いをし、姿勢を整えた後、セシリアは口を開く。

「では先ず、イギリス代表候補生でもあるわたくしがどうしてクラス代表を辞退したかというと

「

「ああ、ごめん。長くなりそだからいいや。理由は織斑君に惚れだからってことにしてよつ」

さつきからよくよく聞いていれば、この人はジャーナリズムの欠片もない気がする。

何故このような人が新聞部の部長なのか、こちらも一夏は理解が及ばなかつた。

「なつ、な、ななつ！？…………で、でも、そのような理由でもいよいよ……」

顔を赤らめ、両手を両頬に当てて恥ずかしそうにするセシリア。正直なところ、一いち方に至つても満更でもないらしい。

幸か不幸か、最後のほうの言葉は一夏の耳に入らなかつた。

「それじゃ、最後に写真撮るうか。ああ、セシリアちゃんも一緒に、写真いいかな？」

薰子が一夏に加え、セシリアにも写真撮影を要求すると、当人は喜びを顔全体にあらわしつつ問つ。

「え……一人で、ですの?」

「注目の専用機持ちだからねえ。そうだ、握手とかしてるといいか
もねえ」

「そつ、そつですか……あの、撮った写真は当然いただけますわよ
ね?」

「そりゃもちろん。わが、立つて立つて!」

ジオスチャーで一人に指示する新聞部員に、一夏は素直に従つた。
こうして記念撮影されるのは、若干恥ずかしいとはいえ、なんだ
か悪い気もしなくない。

このとき篠が少し不機嫌そうな顔をしていたが、それを見る者は
誰もいなかつた。

「じゃ、握手してもらえるかな?」

そう言われ、一夏はセシリアへ右手を差し出した。
セシリアもそれに答え、同じように右手を差し出す。

思えば、数日前にもセシリアと握手をしたよつた気がした。

そのときはその場の空氣的な感じでしたが、今このような形式的な
感じとなると、少し恥ずかしい気がする。

それに、若干セシリアの頬が赤いのは気のせいだろうか?

ともかく、薰子が首に掛けている一眼レフカメラを構えたのを確
認し、二人はそちらへ向く。

「あ～ん、もうちょい笑顔で寄つて寄つてえ。はあい、緊張しない
でえ。それじゃ、撮るよお?」

指示をこなし、最もよいであろう構図を作った一人を、一眼レフカメラのレンズが捉える。

「それじゃあ撮るよ～」

再びカメラのフラッシュが瞬き、撮影を終えた時には、何故かクラスマンバー殆どが写真に写っていた。

おまけに、幕に至つては腕にくつづいてきている。

「何故全員入つてますのー？」

「まあまあ

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょ～」

「これもクラスの思い出という事で」

怒気を露にするセシリアと、それをなだめる女子生徒。この状況、どう対応したものか、と一夏は頭を悩ませた。

というわけで、このパーティは十時過ぎまで続き、通りすがりに警鐘を鳴らした金寺によつてその幕を下ろしたのだった。

ロビーで騒いでいた生徒たちに警鐘を鳴らした後、部屋に戻った金寺は、あるデータを見ることにした。

一夏と分かれたあと、職員室にて千冬より渡されたものだ。

何でも、一日後に中国から一年一組に転入する生徒がいるらしい。それも、書類上中国軍に所属する代表候補生。おまけに専用機持ちだ。

ちなみに、この金寺も昨年一時的に中国の軍事施設に臨時技術顧問としていた経験がある。

当時、中国が第三世代型兵器の開発に着手していたため、それに伴い金寺龍輔にオファーが来たのだ。

(まさか……)

同じ頃中国軍では、国内のI.I適正が高い少女を集めており、彼女等の世話焼き係も言い渡されていた。

向こうに言わせれば、厄介な事柄を押し付けた形だらう。幸いにも特に困る事も無く、軍が第三世代型兵器のプロトタイプを完成させた事によって金寺の役目も終わり、その九ヶ月後に中国から去つていった。

そんな中で、一人だけ印象に残っている少女がいる。

ツインテールで、小柄で、いつもは無駄に元気が良くて、でも少しあびしがりやなところがあつて。

とにかくにも、中国人で一番最初に思い浮かべるのは彼女だ。
そう思いつつ、データに目を通すと、

（そのままか、か。本当に来るのはな…）

データに記されていたのは、その少女のものだった。
あの、少し騒がしかった日々が、脳裏によぎる。

（退屈しねえなあ、俺）

本日何度も分からぬ苦笑を浮べつつ、金寺は就寝の準備をする事にした。

3・再会（前書き）

本格的に鈴音登場。

この辺りの話は、結構考えました。

原作ブレイク、今回もあります。

3・再会

一日後、HR前的一年一組の教室では一夏とセシリ亞を中心になるとある会話が繰り広げられていた。内容は、再来週のクラス対抗戦についてである。

ちなみに、このクラス対抗戦で優勝すると、『学食のスイーツ一年間食べ放題』という景品がかかつていて、そのせいか、女子は全体的に士気が上がっていた。

最も、実際に戦つ一夏は、そのような類のものに興味がなかつたりする。

「もうすぐクラス対抗戦だね」

「そうだ、二組のクラス代表が変更になつたって聞いてる?」

「ああ、何とかつて転校生に代わつたのよね」

「転校生?この時期に?」

転校生、という単語に一夏は思わず耳を傾ける。今は四月下旬、この時期に新しい生徒が転入してくるというのはいささか珍しい。

「うん。中国から来た子だつて」

中華人民共和国。

その国の名前を聞いた一夏の脳裏に、一人の少女の姿が映る。小学五年生の始めに自分のいる学校に転校してきて、中学一年生の終わりに両親の離婚のため中国に帰国した“セカンド幼馴染”。

彼女は今どうしているだろつか、と思わず考えてしまつ。

「ふん。私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

相も変わらず、隣に来たセシリ亞は尊大な態度を見せている。「このクラスに転入していくわけではないのだりつゝ騒ぐほどの事でもあるまい」

窓側の席にいた篠も、一夏のところに来ていた。

「どんな子だろ。強いのかな……」

「今のところ、専用機を持つてゐるのつて一組と四組だけだから余裕だよ～」

そんなクラスメートの言葉を、突如飛んできた言葉が妨げる。

「　　その情報、古いよ！」

クラスのほぼ全員の視線が、音源の方向へ向く。そこにいたのは一人の少女。

「一組もクラス代表が専用機持ちになつたの。そう簡単には優勝できないから！」

まるで勝気な性格を全面的に表現するような一言が教室に響く。ある種挑発的ともいえる態度に、感化させられたセシリアが体を向けた。

「貴方が、噂の転入生なのかしら？」

「そうよー！中国代表候補生、鳳鈴音！」

鳳鈴音、中国代表候補生。

この二つのワードに、一夏は驚愕^{ビックリ}し、田を見開く。

「今日は宣戦布告に来たつてわけ！」

正々堂々すぎる敵対宣言に、一組の教室でざわめきが起きる。

「専用機があるからって、いつまでも舐めてると痛いパンツ、という音と共に途切れた。

そんな意氣揚々とした鈴音の声は、彼女の頭の上で鳴り響いたスパンツ、という音と共に途切れた。

「こつたあ……、何すんの?」

頭を抑えつつ、鈴音が後ろを振り向くと、やけにこたのは、

「もひSHRの時間だぞ」

一年一組の担任、織斑千冬その人だった。

「ち、千冬さん……」

彼女の姿をそのままに納めた鈴音は、明らかに「しまった」という表情をしていた。その場に先生が来たからどうこういつて訳ではなく、どうやらかなり苦手意識があるようだった。

「学校では織斑先生と呼べ。わざと疲れ、邪魔だ」「すつ、すいません……」

そう言しながら追いつき、鈴音をあじらいて、何事もなによつて教壇に向かう千冬。

一方、当の鈴音は先ほどの勢いが完全に相殺されながらも、

「あんまり油断してると、すぐ負けちゃうんだからー覚悟してなさいよ、一夏ー！」

捨て台詞を残しながら颯爽とその場を去つていった。

「…なんですかー? あの方…?」

先ほどの鈴音の言動に、セシリアや篠ら数人のクラスメートは僅かながらも不快感を露にし、

「あいつが…中国代表候補生…？」

一 夏は未だに驚きを隠せない様子であった。

「ねえねえ凰さん、織斑くんに宣戦布告してきたんだって？」

一年一組、朝のＳＨＲ終了後、早速鈴音の元に、何人かのクラスメートが声を掛けてきた。

「うん、まあね。アイツ、あたしの顔見て本当に驚いてたよ」

先ほどの行動がすぐさま級友の間で広まっている事に驚きつつも、得意げに鈴音は答えて見せた。

この一年一組に男子は無論いないので、完全に女子高状態である。もっともな事を言えば、隣の一組が特別なだけなのだが。

さて置き、中国代表候補生である鈴音だが、クラスの面子に紹介されたのが昨日にもかかわらず、元々の性格もあってか早速、クラス内で人気者になっていた。

本当にありがたい。

「このクラスに来てよかつた、と心から思つ。

正直、鈴音は、あまり良い田では見られないだろつと思つていて。当然といえば当然かもしない。彼女の所属する中国国防軍は、上層部が不祥事を起こし何人もの幹部たちが辞職に追い込まれたのだ。

そういうわけで、中国　　中国人への風当たりは良いわけではない。

しかし、そんな事気にせず、クラスの女子たちは明るく接してくれた。

曰く、「別に凰さん自身はその不祥事と関係ないんだし、変に接する必要は無い」との事。

それを聞いたとき、本気で泣きそうになつた。

「で、凰さんと織斑くんって、どんな関係?」

何人かのクラスメートが、至つて真剣な眼差しで聞いてくる。その姿勢にややたじろぎつつも、鈴音は一応答える事にした。

「前日本にいたときの友達みたいなものよ。小五から中一の時まで日本にいたからね」

そう答えると、クラスメートたちは、感心するような、少しがつかりするようなリアクションをとった。

大方、鈴音と織斑一夏が深い関係なのでは、と思ったのだろうか。

確かに彼とは日本にいたときの親友だが、生憎彼に恋愛感情を持つた事は無い。

むしろ、共通の親友の妹に勝手にライバル意識を持たれて、一時期本当に困り果てたぐらいだ。

「でもかなり仲良しなんだよね？いいなあ～」

そう言つ一人のクラスメートは、本当に羨ましそうだった。

「織斑くんと仲良くなれる方法って何かある？」

直後、級友の一人が発した質問に、ほとんどのクラスメートが注目してきた。

「これほど一夏の話題に皆が皆食いつくのかと思つと、今度こそ鈴音は驚きを禁じえない。」

苦笑を浮べつつ、鈴音は眞面目に答える事にした。

「まあ…『世界初のI-Sを扱える男』といつても、元は極普通の男子だから、大して心得る事はないと思つけど…」

と、まで言い終えた後、鈴音はある事を思い出して、口元を僅か

に吊り上げる。

「アイツにそっち方向で近づきたいんなら、本気出さないとダメよ。ああ見えて結構色々な娘に好意持たれてたから」

その一言に、クラスメートたちの驚嘆の声がもれる。どうやら、本気で狙っている人もいるようだつた。

それについても、と思う。

前に日本にいた頃、鈴音が知っているだけでも、一夏に好意を抱いていた女子は多い。少なくとも、その共通の親友の妹を含め、五人以上はいた。

確かに、ああ見えて意外といい男だとは思う。

ルックスも悪くないし、正義感も強い。家事に関しては万能で、優しさに境界線が無い。いつもは飄々として間抜けなだけに、そんな彼の一面を見て好意を抱く女子は少なくなかった。

そして、前に日本にいたときも、「織斑君を私に紹介して」と、何人の友人に言われた事か。

その女子たちは大体、一夏の恋愛に対する異常な鈍感さの前に傍く散つていったというのは、別の話。

(まあ…結果論言ひと、アイツは何も変わつてない訳ね)

一限目開始のチャイムを耳にし、IS基礎理論の授業の準備をしながら、鈴音は心の中でじけむ。

(なーんで今更こんな事習うのかしら)

正直、国家代表候補生である鈴音にしてみれば、何故今になつてこのような授業を受ける必要があるのか分からぬ。

最も、これが一学年共通のカリキュラムの一つなので、どんなに愚痴つても仕方が無いのだが。

適当に復習感覚で受け流しますか、と思いつつ、前方の教壇に目をやると、

(え?)

いた。

若干ウェーブがかかつた、手入れしていないような黒い髪。決して端正とは言えないが、力強さが印象的な顔立ち。赤い右眼と、漆黒の左眼。

金寺龍輔、凰鈴音の初恋の相手。

「嘘……マジで……!?」

思わず声が出たが、驚愕のあまり思ひよう口から出ず、独り言のようになってしまった。

(え……！？ちよつと……え？）こんなトコド……！？)

必死にショートしている思考回路を修復しようとするも、全然上手くいかず逆に焦る有様。

昔、『思考回路がショートする』という表現を鼻で笑っていた自分が馬鹿馬鹿しく思える。

とりあえず、鈴音にしてみれば思考回路はなんだ不良品だつたらしい。

そんな彼女を見て心配そうに声をかけるクラスメートの言葉も耳に入らない。

「　　おー、そこのツインテール大丈夫か？」

次に耳にまともに入ってきた声は、怪訝そうな表情の龍輔のものだった。

予想外の事態に、鈴音は本気で飛び上がりそうになる。

「は、はいっ！大丈夫です問題ないです元気100%です！」

矢継ぎ早に口から出た意味不明な単語の羅列に、鈴音は恥ずかし

くて頭が沸騰しちつになる。

「… そうか、ならいいが。最低限教員連中の話ぐらいは聞いたいた方がいいと思つぞ」
「わ、分かりました…」

恥ずかしさのあまり、小動物のよひにしゅんとしてしまつ鈴音。

結局、金寺龍輔の事で頭がいっぱいになってしまった鈴音は、授業をまともに聞くことが出来なかつた。

やつぱいた。

それが、鈴音を見た龍輔が抱いた第一感想だつた。

見たところ、何も変わっていないうにみえる。自分に対しても過剰に反応していたのは氣のせいではないよひに見えたが。

教室の前の扉から出ると、後ろの扉からその少女が出てきた。

「龍輔！」

自分の名を呼びつつ、駆け足で近づいてくる。

瞬く間に自分の目の前に接近してきた彼女に対し、龍輔は、軽く彼女の脳天に手刀を振り下ろした。

「うっ！？」

「今の俺は先生だアホ。その呼び方は控えなさい」

「ううつ…再会した女の子に向かっていきなり手刀を浴びせるなんて…」

脳天を押さえつつ軽く涙田になる鈴音に、龍輔は適当に溜息をついた。

「おい待て、そこまで俺とお前の中は特別じゃないだろ」

「いいのいいのーあたしにとつては特別なんだし、また龍輔に会えて嬉しいんだもん！」

極めて一方通行な言葉が返ってきたが、それは受け流す事にした。それより、彼女がここまで自分を特別な目で見てきたのか、それが疑問だ。

「にしても、約半年ぶりか？相変わらず元気そうじゃねえか」「えへへー、やつぱりそう？龍輔も相変わらずだね」

表情を緩ませながら楽しそうに話す鈴音を見た龍輔は、少し嬉しさを覚えた。

自分との再会を、こんなにも喜んでもらったのは、今までの人生の中で初めてのことだ。

「…で、どうよ、あれ以降。なんか専用機もらつたらしいじゃねえか」

「やつやつーホントあたし頑張ったんだよー。」

ウサギのよつよパンパン跳ねながら、全身を用いて喜びを露にする鈴音に苦笑しつつ、携帯端末で時間を確認すると、次の授業まで後四分となっていた。

「…悪い、そろそろいいか？次の授業の準備しなきゃなんねえからよ」

「んー…分かった。で…あ、あのわ…今日昼空ってる？出来れば…一緒にお昼…食べたいなあって…」

最後の方の声が完全に細くなっていたが、龍輔はそれをしつかり聞き取ると、思考を少し働かせた後答える。

「…悪い、昼休みは少々立て込んでんだ」

「やつ…」

「でも、放課後だったらその気になれば空いてるが」「本当ー？」

どうこうつ鶴然かは知らないが、本当にこの日の放課後は空いていた。

流石に毎日はつひいだろひいと思ひ、【白式】の稼動調査やツインコア回調率調整は、三日間に一回にすることにしたのだ。

一瞬、昼休みNGを聞き表情が暗くなつた鈴音だが、龍輔が放課後OKを云ふると、一気に表情が明るくなる。

「じゃ、じゃあ…放課後第四アリーナね！」

それだけ言い残し、まだ嬉しさを全開にしながら鈴音は教室に戻つていった。

周りの生徒が怪訝そうな表情で彼女を見ていたが、どうやら気にしているらしい。

(…なんか、相変わらず表情がコロコロ変わる奴だなあ…)

適当にさう思いながら、次の授業のために龍輔は職員室に戻つて
いった。

七

午前中の授業を終えて昼休み。

一夏と鈴音は食堂前で偶然鉢合わせていた。

丸々一年間、顔を見ていなかつた一人は、昔の仲もあり自然と話し始める。

「びっくりしたぜ。おまえが一組の転校生だったとはな。連絡くれりやよかつたのに」

「そんな」としたら、劇的な再会が台無しになっちゃうでしょ」「なあ…お前って、まだ千冬姉のこと苦手なのか？」

千尋の話になると、鈴音はしきめ面を浮べる。

「そ、そんなことないわよ…。ただ…その、得意じゃないだけよ」

嘘である。

日本に滞在していたときから双方は家族ぐるみで縁があつたが、そんな中で厳格な千冬は本当に苦手であった。

カウンターで鈴音が中華蕎麦を受け取るのを見て、一夏が率直な感想を言う。

「相変わらずラーメン好きなんだな。…丁度丸一年ぶりになるのか、元気にしてたか？」

「まあな。色々あつたけど、本つ当アンタは何も変わってないみたいね。根幹的なところから」「何だよそれ…」

そんな光景を、一夏の後ろに並んでいる一組の生徒たちは、複雑そうな、不思議そうな表情で見ていた。

「で、いつ代表候補生になつたんだ？」
「去年。アンタこそ、ニュースで見た時吃驚したじゃない」
「俺だつて、まさかこんな所に入るとは思わなかつたからな」
「入試の時にI.Sを動かしちやつたんだつて?…どうしてそんな事になつたのよ」

「何でつて言われてもなあ……」

頭を搔きつつ、一夏はその時の経緯を話し始めた。

「…………で、その後色々あって、ここに入学させられたわけだ
「ふーん、変な話ね」

鈴音が一夏の話に同調した時、隣のテーブルに陣取っていた筹とセシリ亞が、堪忍袋の緒が切れたように立ち上がり、一夏に肉薄してきた。そして一人そろつてテーブルをバンと叩く。

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが！」
「そうですわ、一夏さん…まさか『うちの方と付き合つていらっしゃるの！？』

そんな二人を見て、

(随分必死ね…もしかしてこの二人…)

心の中で独り言を呟きつつ、一夏の方へ視線を向けると、

「違つぞ、ただの幼馴染だよ」

直球的な返事を返した事により、前方の二人が安心しているところだった。

(さすが一夏。この辺の安定感は抜群)

「鈴、どうした?」

どうやら人の本質といつものは早々変わらないらしく、一夏の本念「ふりも健在のようである。

最早、呆れるどころか軽い尊敬の意を示す鈴音を見て、一夏がきよとんとした様子で尋ねる。

「なんでもないわよ。やっぱアンタって何も変わってないな、って」
彼女に言わせて見れば、それを聞いて頭の上に『?』を浮べると
いつも含めて、だ。

彼は昔から、気配りはある程度きく男なのだが、どうも恋愛事情となると、異様な鈍感さを見せ付けるようだ。

一方、『幼馴染』といつワードにて、篠は首を傾げる。

「で、一夏。この人は?」

「ああ…まず、じつちは篠ノ之篠、前に話しただる。篠は“ファースト幼馴染”で、お前は“セカンド幼馴染”、つてことだ」

前方の一人が深い仲でない事を確認したせいか、篠は安心したよう表情を緩めた。

「“ファースト”…」

「ふーん、なんだ。はじめまして、これからよろしくね

「ああ、じゅうじゅんや」

探るような視線を幕に向けつつ、鈴音は笑顔で挨拶する。

それを見て若干疎外感を感じたのか、蚊帳の外だつたセシリアが自分の存在を誇示するように咳払いをする。

「わたくしの存在を忘れてもらつては困りますわ。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。一夏さんとは先日クラス代表の座をかけて 「そういうえば一夏、クラス代表になつたんだつて？」

自分自身のこととを尊大に語りだしたセシリアの存在を無視するよに鈴音が話を一夏に振る。

「ああ、成り行きでな」

「…まさか自分から立候補したとか？」

「まさか、まあ色々あつて 「 つて、ちょっと聞いてらっしゃるの！？」

ここで、先ほどから独り語り状態だったセシリアが一人の会話に介入した。

「ん？大丈夫よ、あなたの事は知つてるし。 セシリア・オルコット。イギリス代表候補生で、英国内BTB兵装適正者の中で唯一A。あつてる？」

「え、ええもちろん！分かつてくださいていればいいのですわ！」

鈴音の口調はかなりぶつきらぼうだが、自分のことを分かつてもらつていて安心したのか、セシリアらしい態度が復活した。

「なあ、B-1兵装、つて何だ？」

一夏の疑問に、鈴音が端的に答える。

「簡単に言えばビーム兵器よ。彼女はイギリス国内でその適正が一番高いって事」

「そりなのかな…代表候補生つてやつぱす」「いんだな」

一夏から賞賛の言葉を掛けられたセシリアは、頬を赤らめながらもとても嬉しそうだつた。

その一方、篝は不機嫌そうな表情を浮べている。

一人の様子を見て、先ほどから抱いてきた疑惑が具現化してきた鈴音は、話題を切り替える事にした。

「じゃあさ、あたしが練習見てあげよっか? I-Sの操縦も」「おっ、そりゃ助かる」「一夏に教えるのは私の役目だ!」

鈴音の提案を聞いた一夏が嬉しそうな表情をするのを見て、篝が二人の会話に介入した。

それにセシリアも続く。

「それはわたくしの役目ですわ! 第一あなたは二組でしょ
う? “敵”の施しは受けませんわ!」

セシリアの言葉は的を射ていた。クラス対抗戦となれば、一夏と鈴音は敵同士だ。

だがそれ以前に、鈴音はセシリ亞が言つた最初の言葉の方に、力が入つているように思えた。

しばらぐ、鈴音の試すような視線が篠とセシリ亞に向けられる。

「…なんだ？」

「な、なんですか？」

そんな二人の様子を見て、嘆息した鈴音は、

「まあ、確かにクラス対抗戦となれば一夏とは敵同士だしね…分かったわ、やるからにはちゃんと教えなさいよ」

それを聞き、虚を突かれたような表情になる篠とセシリ亞を尻目に、鈴音は中華蕪麦のスープを飲み干す。

「じゃあ、また後でね。練習しつかりやりなさいよ、一夏」

この件をボーッと見ていた一夏にそつ言つて、鈴音はそそくせと食堂を去つていった。

色々大変な事になりそつだなあ、と、心の中で呟きつつ。

3・再会（後書き）

鈴音が金寺にベタ惚れ。

金寺龍輔というキャラクターが明確に確立した段階で、鈴とのカツ
プリングが思い浮かびました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3531y/>

Infinite Stratos -Futures Road-

2011年11月20日08時59分発行